

# 伝習館



東京同窓会会報

第7号 2007.1.1



平成18年度伝習館東京同窓会総会結果報告

思い出の柳川

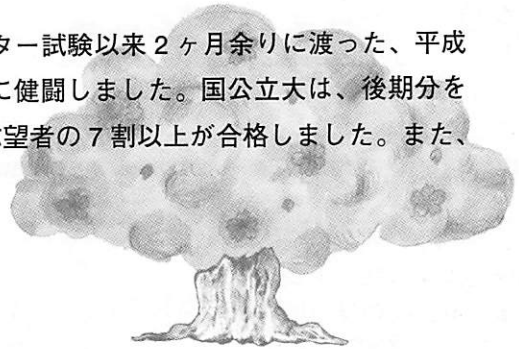
じくどる教員たち

柳川サン イタテ来たバンモ

ふるさと瓦版

# 全国に伝習生の桜咲く!!

昨年1月21日(土)、22日(日)の大学入試センター試験以来2ヶ月余りに渡った、平成18年度大学入試において、本校卒業生諸君は大いに健闘しました。国公立大は、後期分を合わせ121名の現役合格者を出しました。国公立志望者の7割以上が合格しました。また、私立大についても、大健闘でした。



## 平成18年度進路状況

国公立大学 134名 (現役 121名)!

### ■主な国公立大学合格先

○京都大学	2名	○筑波大学	2名
○東京工業大学	1名	○東京外大学	1名
○横浜国立大学	1名	○大阪大学	2名
○九州工業大学	4名	○広島大学	4名
○九州大学	17名	○熊本大学	19名
○佐賀大学(医1名)	26名	○長崎大学	7名

私立大学 501名 (現役 461名)!

### ■主な私立大学合格先

○早稲田大学	2名	○西南学院大学	60名
○立命館大学	39名	○同志社大学	19名
○慶應義塾大学	2名	○福岡大学	117名

防衛大学校 5名 (1次合格 43名)!

公務員等 12名!

## 還暦祝

貴方に逢いたい四十七年目の大同窓会!

高十二回生 井上功夫

平成十四年十月十三日(日曜日)に伝習館高校第十二回生大同窓会が柳川御花で開催されたが、当日伝習館校庭に記念植樹がされ、現在写真の様に「ハナミズキ」の花が美しい姿の写真が、地元高十二回生、世話人袋町野彰君より私あてに送付されて来てじっくりみていると当日全国より二八七名という多くの出席者で旧交を温めた時の感動が再びよみがえってきました。

### 編集者註

十八年一月三十一日拝受した原文のまま。井上さんは平成十八年八月十四日ご逝去の由、ご冥福をお祈りします。このお手紙が遺稿となりました。

# 第7号 2007.1.1

## 東京同窓会本部より

平成十九年年頭会長挨拶	会長 江崎正直	2
平成十八年東京同窓会総会報告	会長 江崎正直	3
お返事は便りです お返事が頼りです	高21 白谷政則	3
思い出の柳川 同窓会総会特別講演より	講師 松永伍一	4
総会収支報告書		8
賛助金ご協力状況報告		9
賛助金振込票通信欄コメント紹介		10
東京に輝ける三稜の星たち	副会長 松永 肅	12
平成18年度修学旅行生との交歓会	会長 江崎正直	14

## 先輩・後輩より

我が中学「伝習館」	中41 高戸顕隆	15
ド迫力！大満足！		
よかやっかんも（第4弾）じくどる教員たち	高1 横山二三男	16
柳川サン イタテ来たバンモ！	女47 作山ミツ	18
津留誠一彫刻展開かれる	高10 大村平人	19
ゴンシャンとジョンと亡き友へ	高12 白尾邦久	20
詩 三篇	高20 椛島豊子	21

## 学年幹事より

「関東高四会」のあれこれ	高4 高四子	21
高6回卒（昭和30年卒）だより	高6 石橋 修	23

## ふるさと瓦版

杉森女子校が男女共学に	24
古賀政男の歴史	24
ふるさと大使に大川栄策さん	25
エツ伝説	25
伝習館大川支部 再出発	25
上覧された河童の手	26
福岡県市町村合併マップ	26

## 書籍紹介

柳川の社寺建築Ⅰ	27
海老名弾正の伝記	27
海軍主計大尉の太平洋戦争	27
木村緑平句集Ⅰ・Ⅱ	27
私のむかし（少年の日）原画展	27
FAX 送信紙	28
募集	29
編集後記	29

# 伝習館



# 東京同窓会 会報

# 東京同窓会本部より

## 平成十九年年頭会長挨拶

先輩よ！ 後輩に負けるな！

伝習館東京同窓会 会長 江崎正直

会員の皆さん！ 明けましておめでとうございます。

お元気で新春をお迎えのことと存じます。

月日のたつのは早いもので、この東京同窓会会報を創刊して今回の第7号で満四年になります。本来なら年二回発行したいところですが、賛助金の集まりが予定通りに行かず、年一回とせざるを得ませんでした。この会報が会員相互の情報交換に役立っていることは皆さん方が認めておられますので、今後とも賛助金のご協力よろしくお願いたします。

昨年は隔年ごとの総会を七月九日に挙行了しました。皆さん方のご協力のおかげで240名の多数のご参加を得、関係者の努力が実って大盛会でした。

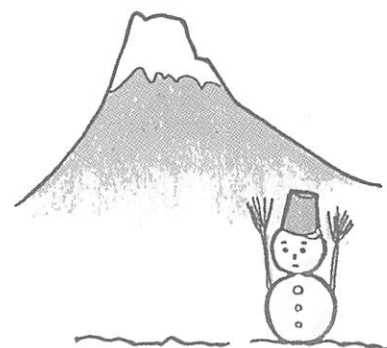
昨年は母校伝習館から二つの朗報が届きました。

- 一、修学旅行がスキー遊びを止めて東京に三泊四日の社会研修に大改善された
- 二、去る四月一日、福岡県の人材育成プログラム推進校、八校の一つに選ばれた

私は四年前、会長就任以来「スキーは社会人になってから、いくらでもやれる。高校生は今やるべきこと、勉強に努力せねばならない」といい続けてきました。その妥協案としてここ数年、四泊五日のスキー旅行のうち初日だけ東京に一泊。東京同窓会で昼・夜とお世話してきました。それが今回、昨年九月の修学旅行からはスキーを全廃して東京だけで研修する内容に改善されました。大変な進歩で喜ばしいことです。初日、一晚、東京同窓会の学年幹事が中心となりお世話しました。まず松永・原田両副会長講演のあと、六組に分かれて膝を交えて先輩が後輩を激励する座談会を催しました。礼儀正しい立派な生徒たちばかりで、座談会の時間が少なすぎたのが惜しまれます。来年の改善点です。

文武両道に秀でたところが認められて、福岡県の優秀高校八校の一つに選ばれたのはまことに名誉なことで、同窓生として大変嬉しく思います。先生方のご苦勞の成果でしようが、生徒たちもこれに応えて勉学に勤しみ、進学率も向上したのが認められたものです。同窓生のわれわれとしては、更なる進歩向上を期待しています。母校がこのようにがんばっているの、同窓会としても負けずに活力ある組織にしていきたい。

今年も会員皆様の絶大なるご協力をお願いいたします。



# 平成十八年度東京同窓会総会報告

江崎正直

平成十八年度東京同窓会総会は、昨年七月九日、ホテル・グラントパレスで二百四十名という多数の参加者を得て、盛大に開催されました。来賓として柳川から立花同窓会長、横山伝習館長、武藤同窓会副会長、西山顧問をお迎えし、柳川色の濃い総会になりました。総会に先立ち、大莞村出身の詩人・松永伍一さんより「想い出の柳川」の演題で講演をしていただきました。講演内容については別稿をご参照下さい。松永さんは大莞中学、花宗中学の先生をしてもらったので教え子たちの出席も多く、会場は満席になりました。訥々とした地味な話し振りでしたが、大変内容の濃い講演でした。百冊以上の著書があります。

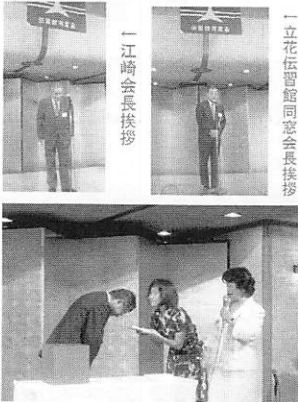
今年には柳川郷土色の濃い総会にしようと、学年幹事を中心に関係者の努力で、柳川の多くの商店からご協力を得て、多数の商品を安く提供していただきました。そのおかげで柳川コーナーは大繁盛で、特に粕漬け、がね漬けといった有明海を代表する商品は早々に売り切れてしまいました。買い損なって残念がった方も多かったようです。御花やホテル・グラントパレスなどからの大型景品の抽選も要領よく短時間で済み、懇親会に十分の時間を割くことができました。ご出席の皆様にはゆっくりと懇談・交流が図られてよかったです。

殊に西山顧問が現職のころの教え子たちが多数出席して会を盛り上げるのに貢献しました。閉会后、西山顧問の奪い合いになったそうです。そこは伝習生、仲良く一緒にあって、最後は銀座へ繰り出した由。卒業生が東京周辺に多数在住している先生方には、現職・退職を問わず東京同窓会の総会に出席されて会を盛り上げていただきたい。恩師を慕って集まる。会を盛大にする大きな要素で、今後の課題です。

天候にも恵まれ、多数の参加者で盛り上がり、盛会裏に会を終了することができました。

## 平成18年度 伝習館東京同窓会総会

平成18年7月9日  
伝習館東京同窓会総会  
於：東京都「ホテルグランドパレス」



一 横山 伝習館校長挨拶

一 十八年度本部総会  
戸田実行委員挨拶

一 江崎会長挨拶

一 立花伝習館同窓会長挨拶

## お返事は使いです お返事が頼りです

高21回 白谷政則

六月某日 総会十日程前

「出席者は何人になった？」

「もう少しで二〇〇人です」

「返信の数は？」

「一〇〇〇通弱、まだ半分以上返事ありません」

「料理は何人分で予約しますか？」

「とりあえず二〇〇人になったところで仮発注して、10人増える毎に追加しよう」

「多目に予約しといて後で減らすのはまづいですよねえ」

「10人位ならよかばってん、当日になって20人も30人もとなると追加もキャンセルもきつかばい」

「早よ返事のほしかねえ」



毎度お馴染みの光景です。

「返事くらいしろ！」と普段子や孫に言っているお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、もしかしてあなたも返事忘れていませんか？ 欠席だから出さなくもいと思っていませんか？

お返事の葉書は総会（懇親会）の学年別に分けられたテーブルに置かれ「何十年ぶりに友達の連絡先が判った」と喜んでいらつしやる姿も見受けられます。お返事は同級生の方への近況報告となり、正にお便りとなっています。

総会の準備をする私達は出席の返信がある度に、ホテルへの連絡・景品の手配とやる気が出てきます。逆に返事が少ないと案内状が届いていないのではないかと不安になります。総会当日も座席の配置は大丈夫か？ 料理は？ 飲み物は？ お土産は？ と心配がつかまません。本当にお返事が頼りなのです。

葉書一枚で母校や故郷がぐんと近くなります。欠席でも結構です。少々遅れても構いません。お返事は必ず出して下さい。そして総会にも、ぜひ一度ご参加下さい。お願い致します。

### 平成18年度東京同窓会 総会案内状内訳（概算）

発送総数	2,250名	(100%)
返 信	1,103名	(49%)
出 席	223名	(9.9%)
欠 席	742名	(32.9%)
(内 逝去・辞退)	(30名)	
宛先不明	138名	(6.1%)
未返信数	1,147名	(50.9%)
		以上

若い年代ほど返信無しが多いようです。仕事、子育てと忙しいとは思いますが、50%以上が梨の礫とは残念です。

#### 最後に一言・独り言

伝習館の卒業生たる者  
《返事出すくらいの常識はあるうもん》と言いたいが、無関心な人の耳には届かないのかなあ？ いやそんな事ないよと願いつつ次回に期待しよう。

# 思い出の柳川

松永 伍一

平成十八年七月九日・伝習館東京  
同窓会総会に於ける特別講演より  
—要約文責— 小野斜庵

初めまして松永伍一でございます。  
私は二十七歳で三瀧郡から上京して文筆生活50年になります。北原白秋が亡くなったのは昭和17年五十七歳ですけれども、私は後一年で白秋より20年長生きしたことになります。

## 八女中学

私は八女中学に行きました。なんで八女中学かという、大木町から朝登校するとき東に向かつて行くから西向きに行くよりいいだろうと。西向きに行くとは伝習館だったんですが。もう一つは、柳川には柳河女学校（柳河高女のこと）があり、不良になるからと。戦争最中（なか）のことでありそういう単純な理由で八女中学に行きました。

## 柳川の二つ

私は今東京で物書きしてるんですけど「ご出身はどちらですか？」と聞かれると「柳川です」と言うんですよ。正確に言うと福岡県三瀧郡大木町なんですけど。三瀧郡といっても判りません。柳川という和白秋のイメージがあつて、水の

柳川、水の郷柳川というので何か美しい世界をすぐ描いて頂いて、私、得をしていきます。柳川の方に申し訳ないから何かお返ししなければいけないあと思っています。

## 工場勤員のこと

戦争が盛んになつて八女中学から三池製作所渡瀬工場という所に行きました。ここに柳河女学校の方で私達より二つ位上の方が来て居られました。どなたかここに居られるかも知れませんが（聴衆の方から発言あり一時中断）

朝は6時4分の蒲池駅発の各駅停車で開駅で下りて、てくてく工場まで歩いて行き、8時から朝礼があつて、帰りは柳河女学校の先輩のお姉さん達と一緒に電車に乗るのが楽しみで、余り言っちゃいけないけど、好きな方もいらつしゃって、ウチダミワさんとカマエバラワカバさんとかいらつしゃって……。 (笑)

(編集子) お二人のことを調べました。  
柳河高女45回卒の内田（現姓戸上）ミワさんと前原（富安）若葉さんで、お二人とも大変懐かしがっておられました。

あの方達は皆さん柳河駅で下りられるんです。各駅停車が出るまであそこで何か待たなければなりません。駅で下りて国道に出て行かれる迄の間少しゆっくり歩いていらつしゃって、私達も電車がゆっくり走りますので、丁度別れの時に手を振ったりして（笑）、戦争の最中にそんな色気を出していたという思い出も柳川で、だから親たちが、心配したのも

無理もないですね。伝習館に行ったら隣に柳河女学校があるから不良になると言われたのも……

## 文学を志す

戦争が終わつて何になるかということになったときに、やっぱり一芸一能に秀でよ、次の時代は自分の才能が一つあれば生きていける、そういう時代なんだと文部大臣のスピーチが新聞記事の第一面に載つたんです。

「若人よ一芸一能に秀でよ！」  
と。では何になるかといつたら、文学者になろうと思つた。文学者になるとすれば、一番近くにいた北原白秋という存在が頭にこびりついて離れなくなり、どうすればいいかと、頭の上に瘤が出来ているような存在は、取り払うことはなかなか難しい訳です。そのために私はなるべく白秋のものは読まない様に努力しました。そして宮沢賢治とか石川啄木とか東北の方に向かつて頑張ってみようとして……自分では百姓をしてましたから。

で『日本農民詩史』というのを五千枚、八年かけて書き続けました。これは忘れられていた農民が明治時代からずーっと今日まで、どんな農村の生活を表現して来たかということを掘り起こしながらやってくる仕事で大変な苦勞をしました。やり甲斐のある仕事でした。

## 長谷健のこと

高校3年の時に、矢留小学校の庭に白秋の詩碑が除幕されました。その時に八

女高校の校長宛に来ていた招待状を持つてお前が行つてこいと言われて、私が校長の名代で出席したことがあります。そしたら長谷健さんがおられて、あの方、宮永の出身で、「あんた、ダリカン？」と言われて。こうこうで八女高校の校長の名代で来ましたと言つたら「ああそうカン良かった」と。「あんたコツツアン来ンノ。酒も飲んでヨカバン」と言われて、連れていかれ……。 (笑)

そういう縁があつて今も長谷健賞というのが柳川で出されていますが、その審査委員長もつとめております。長谷さんが昭和32年の、ほんとに暮れのぎりぎりのところで交通事故で亡くなられて……そのほんの数日前に通の葉書が来て、来年の抱負ということで、『帰去来』という白秋三部作にとりかかると決意の程が書いてありました。だから長谷さんの役に立つことを思つて長谷健賞の審査委員長をやっています。

## 五木寛之のこと

八女中学に行った関係で五木寛之君が三つ後輩なんですけど、歳は二つ下なんです。引揚者なんです。あの人が直木賞をとつたとき、西日本新聞の文化部の記者から電話があつて、今金沢の五木さんの所でインタビューを終えて帰つてきた処だけども、しきりに松永さんの事を話していた。八女中学時代に先輩が頑張っていたのを知つた。だから僕も頑張らなきあと……と。本人が言っていたけど、中学時代、五木さんはどんな子供だった

んですか？と聞かれたけど、いやあ中学時代全然知らないですよ。彼は引揚者で、八丁牟田に一寸家を借りて、自転車通学していたらしいですが、前後になって行くという事も無かったんです。

そのうちに手紙を頂いたりしてあ本当に八女中学の後輩だったんだと。で、いっぺんお会いしましょうということ、赤坂のホテルで会ったんです。

それから、二人で全国を対談して歩かうかと……あの人は割とそういうことが好きで、企画を出してきて「日本幻想紀行」というので「月刊現代」に毎月一回づつ対談を載せることになりあちこち廻りました。

ある時、飛行機で羽田から函館へ行く時、タラップの上で、私が今度の小説、あれは書き出しがとても面白かったと、それは『戒厳令の夜』という小説でそれ程売れなかった本だと思えますが、私にとつて非常に縁の深い……その書き出しを褒めたんです。

福岡のある小さな喫茶店にスペインのパブロ・ロペスという人の絵がかかっている。その画家がどんな人物かというのを追跡していく新聞記者が頑張る話です。書き出しの所がほんとに描写がすごく良かったから、それを褒めたんです。そしたら一寸相談があるけどと言うんですね。何ですかと。パブロ・ロペスの未亡人が南米のチリに生きているから、この絵をその人の所に運び出す。ほかにも埋蔵され筑豊炭鉱に隠されているらしいという話ですが、それをチリに運び出す

のにどうしたらいいかと私、相談受けたんです。私は小説家じゃありませんから、そういうのに全く関心もなかったんですけれども、冗談で、大隈半島の突端にチリの貨物船が接近して、そこまでは九州山脈を山窩が何かに選ばせればいいなあ、と言いましたら、彼は山窩というのを詳しく知らなかった。山窩の資料を、五木君に貸したら、これは面白いと言ってます。どうするかというと、なるべく、筑後平野を舞台にしたいと言……それであんた、何かペンネーム持つてなかったかと私に聞くので、高校時代に水沼淳志という名前を持っていた。と言ったら、それを借りて山窩の親分の名前にしたいと。どこを舞台にするかという大藪の宮だと言ってますよ。私が大藪の出身でお宮が廃屋みたいになっているから、何とかそこを舞台にして、水沼隠志という名前で、山窩の親分ですが、すごい才能があつて、学問的な研究もしているんだけれども、世の中に認められない。が山窩に対しては命令する力を持っている人で、その人の住居を大藪の宮にするという。

五木君は取材するのは全部、小さな手帳一つ持って、本当に良くメモするんですよ。出来上がった小説がまた大藪の宮が見事に描かれていてびっくりしました。さすが小説家だなあ、嘘八百もいいとこですけど（笑）。

その取材の夜「お花」で対談をしました。お風呂の中で一時間以上やって、あとで話題になりました。風呂の中での対談の例はなかったのですから。

## 白秋のこと

私が白秋に興味を持ったのは、何故か四十歳過ぎてからなんですけど、私の家も油屋という屋号で、油屋のジョンと呼ばれて居ましたから、白秋も沖ノ端の油屋のジョンでした。白秋はジョンという名の由来を知ってた人だろうか、作品の中には英語流にJOHNと書いてありますけど、あとジョアンとかジュアンとかジョバンニとかヨーハンとかヨーロッパに色々いっぱいあります。この辺のことを白秋は知っていただろうかと思いついて。イスラエルに行ったんですが、ジョンのルーツというのは、イスラエルのヨルダン川の所で、キリストに洗礼を授けていた洗礼者ヨハネスのヨハネスから出ている。私はそこに行つたとき、なんとなく心が和む様な気がしました。

私はその頃白秋の詩の中の、隠れキリシタンを詠つたものに対して、一寸疑問を持つていましたから。あの白秋がキリスト教に興味を持ったのは、若いときの一時期なんですけど、そこから白秋の世界が開けて行くんですね。

キリスト教が柳川に影響を与えた時代が一時期あるんです。私は少し調べものの為に、バチカンの一角にあるイエズス会文書館を訪ねましたが、柳川のレシデンシア発、柳川の宣教師の宿舎からローマに送った手紙類が何通も残つています。ジョアン・ロドリゲスという人が柳川に居て、そこから発信した手紙などです。だからジョアンとかジョンとかいう洗礼名が柳川周辺にもあつて、その名残

が白秋のうちにも繋がって、私にも繋がった。色が白かったから可愛いと言われた時期もありましたけど。江戸時代には油を絞つていた家だから、ある程度経済的に豊かだったから、その可愛い息子のジョンだったんです。子供の時にそういうこと意識がなくても、何となくそういう風と呼ばれているという心の驕りとか甘えとかいうものがありますと、人間というのはナルシズムと書いて自分自分を美化していったり、自分をいいものと捉えていく様な感覚が育つていくんですよ。文学者というのは概ねそんな性格を持つていて、白秋はその中でとりわけ美意識の強い人だったと思います。

白秋に隠れキリシタンの娘さん達の少女のことを描いた詩がなかなかいいのがあります。そういう詩を書いた時なんかヨーロッパから入つて来たキリスト教の思想みたいなものを、日本人がどういう風に受け止めていたかということに切り口を見つけ出した。

その後、ぱつと「ふるさと」にテーマを切り換えて、第二詩集の『思い出』で大きなデビューを果たす訳ですね。

『思い出』を書くときは、キリスト教の匂いは消えていく。第一詩集の『邪宗門』というのはキリスト教の影響、南蛮文化、南蛮渡来の文物を評価して、それを讃えていく事の中に新しい時代の芽吹きというものを発見しようという、そういう主張が明治四十年近くになって出てきて、白秋が出てきたことよって、日本の文学にも新しい風が吹いて来たんです。その次、『思い出』を出します。で、柳川

というのがわーっとクローズアップされます。日本の今までの詩人たちが、望郷の思いで色々な詩を書いていてくれるけれども、それは皆細切れみたいなものだったんです。白秋は堂々と柳川全般の自分の少年期の思い出を描き出した。だから「ふるさと」というものが文学の主潮になり得るということ、白秋が日本で初めて実証した訳です。

あそここの「我が生い立ち」という、長い長い序文があつて、沖ノ端周辺の風物が描かれています。あれは非常に優れた、文学史的にだけじゃなくて、柳田国男が民俗学というのを提唱しますが、その民俗学の「遠野物語」に匹敵する様なものなんです。それを私が後で『北原白秋』というNHKブックスに、民俗学的な大きな成果をあの序文は示しているということを書きました。山本太郎という白秋の甥御さんの詩人が、とても喜んでいました。

## 東京のいや

私が東京へ出ていくきっかけを作ってくれたのは、柳原白蓮という歌詠みのおばあちゃんでした。大正天皇の従妹なんですけど、筑豊炭鉱の伊藤伝右衛門という大金持と結婚させられてそこを脱け出して、社会主義者の宮崎龍介と言う人と駆け落ちして、当時のマスコミを賑わすんです。そういう天皇家に縁のある人が、三瀧郡の私の家に泊まりました。私の作品を読んで「あんた、才能あるよ」とおだてて、どうして東京に出ないの、白秋なんかあんな人が近くに生まれて、

白秋の跡継ぎする積もりで頑張らなきゃあ、と。跡継ぎする積もりは全くありませんけど、何か頑張らなきゃあいけないとは思ってました。

白蓮さんが、じゃあ今夜お母さんに話して上げると言つて、夜の内に母親を呼んで、可愛い子には旅をさせろというじゃないの、あの子は才能があるから東京に出さないさい。母親がすつと「じゃ判りました」と言つたそうなんです。

八年間母親と闘いながら、抵抗して東京に出るんだ！駄目だ！東京に出るんだ！駄目だ！と、まあ本当に葛藤がありましたけれども一晩の内にころつと考えが変わってしまった、出てもいいということ。

八丁牟田の駅から出て行つたんです。故郷を追われる如く、といいます。私は悪いことをしていないから追われることは無かつたんですけれども、何となく小さい気持ちで出て行つて、大きな目標がありながら、小さい気持ちで出て行つたんです。

さてそれで、どうするか、練馬の大根畑の畑がついている一角の麦畑を買います。家を建てる準備をして、二十七で土地だけ買いました。それから大木町にあつた田圃を少し売りました。そのお金で上石神井に家を建てました。ということで、地盤だけは作つたんです。

次に、どういう風にして稼いで生きて行くかということが判らない。ある朝、母親が夢に出てきました。上石神井の近くに松本清張さんが住んで居られるんですが、母親が夢の中で、人殺しの小説な

んか書いたら駄目よ、と言ってますよ。ああそうか、あの母親から生まれて来たんだなあ、だから心配して夢に出て来たんだ。だつたら命を亡ぼすような推理小説なんか一切書くのは止めて、子守唄の研究をやるうと思ひました。子守唄というのは命が生まれ出る訳ですから。ところが色々資料を漁つても、なかなか見つからなくて、本当に困っていました。

## スタート

いよいよ子守唄のことをスタートしようかと思つている時に、ある一人の学生が私の所に訪ねてきて、子守唄の本がありました。国会図書館に行つても、見つからなかつたのが古本屋にあつたんです。『日本伝承童謡集成・第一巻子守唄篇』という、これは編者が北原白秋なんです。昭和十六年頃、戦争が始まつた頃から、この仕事にとりかかつてんですよ。で日本の各地に残っている童謡とか子守唄とか、そういうのを今のうちに集めとかないと消えてしまふよ、ということ

とで、昔から日本に伝承されている童謡を集めたのです。第一巻が子守唄で紙もざらざらの紙ですけど、戦後間もなく出てくるんです。昭和十六年から始まつて、白秋は昭和十七年の十一月に亡くなつて……。そういうのが見つかつて、見てみたら非常に良い仕事なんです。私達が歩いて探していかなければならないはずのものももう既に子守唄として三千三百編入つてました。それを元にして三千三百白い歌が残つていそうな所を、歩いてということ、私の旅が始まる。それでア

イウエオのAから取材して行こうと思つて、天草に行つたり五木村に行つたり、ずーっと調べていつて、一応の仕事が纏まりかけたところで『日本の子守唄』というタイトルの本から、私のスタートになっている。

それを最初中央公論に書いた。そして五木君がまだ、売れていない時に金沢の古本屋でそれを見て、ああ先輩がこんな長いルポを書いている、凄く頑張っているなあ。で彼は五木村の五木というのに非常に興味があつて、五木という姓のところ、戸籍を入れたんです。あの人、昔は松延寛之というんです。

## また白秋のこと

白秋が一番力量を發揮した世界は、何だろうかといわれると、童謡なんです。童謡の世界で白秋程の才能のあつた人は明治以来誰も居ません。詩の世界ではもつと白秋よりも優れた仕事をした人も居ります。評論も相当書いています。でも童謡の世界では、白秋程の才能を發揮した人は居ない訳です。その、童謡で曲が付いたのは、随分沢山あります。皆さんもたくさんご存知でしょうけど、その童謡の中で割に怖い童謡を書いているのがいっぱいあるんです。お母さんが出かけていて、子供に留守番させている。子供が淋しくてたまらなくて、金魚鉢の金魚を一匹殺す、まだ帰つて来なくて二匹殺す、最後は三匹殺す。そういう詩も書いています。それは曲になりません。今だつたら、大事おぼこです。曲が



付いて歌ったら動物愛護的な考えから外れるということになりました。でも、才能というのは、そういうところまで堂々と書ける力が才能なんです。何か品評会で優秀な成績をおさめる為に、いいものを見せびらかすというのが文学じゃないから、自分の中にあるものを、ちゃんと表現しなくてはいけない。そういう毒もちゃんと持ってた人が白秋です。恐ろしい才能を持った人です。

白秋が平和の時代に生きていた人だとしたらイスラエルに行つて欲しかった。そして、自分の油屋のジョンのルーツを確認したら確実にもう一つ大きなものに出会つただろうと思います。それはローマングラスというガラスなんです。そこで一寸自慢話になりますけど、自分のルーツを調べにイスラエルのヨルダン川の畔まで行きましたら、その辺の砂漠に埋もれて銀化したガラスが出て来るんです。ガラスというのは砂の中に五百年以上眠っていると、金とか銀とかに化けてあらわれて来るんです。白秋はガラスが好きで、柳川のビードロ瓶といわれ、南蛮渡来のものが好きだった人ですけど、あの人にそのローマングラスの二千年位前のガラスが金とか銀とか吹き出して来ているの手に取らせなかったです。

私は、ここだけ白秋に負けない様にと、思つて、そのコレクションを始めました。家内から「これで、一軒家が建つね」という位のものを集めました。「私は帯一本買って貰つた事もないのに」と言われながら……でも買ってやれないまま、こないだ死んでしまいました。

## 一冊の本と水上勉のこと

柳川の国道橋の東側の隅つこの方に、屋台の古本屋が出てた時代がありました。そこで一冊の本が目に入りまして、水上勉の『風部落』というざら紙の、粗悪な本でしたが、何故かその本が面白そうで、立ち読みしている内に買つて帰つて、この程度のものでしたら俺だつて書けるなあと思つた。余り上手でないし、そのうち読んでいくと、福井県の若狭地方の分教場の話とか何か小学校の代用教員をしている人の話が出て来るんですよ。その生活習俗というのは、良く出てるんだけど、文体がいま一つしっくりと来ない。まだプロの世界じゃないなあと思うんだけど、本になつていて訳ですから、ああこの程度で本になるのだなあ、わたしを励ましてくれた本です。で、東京に出る時に、いろんな本は人に上げたりしてしまいましたけど、その本と他の数冊はちゃんと持つて行きました。ところが、東京のどこを見回しても水上勉という文学者は居ないんですよ。あれは何だったのか夢見てたのかなあと思うくらいになつていたら『雁の寺』なんかが出てきて直木賞とつて。

私は北軽井沢に家がありますけど、あの人は中軽井沢なんです。水上さんの所に遊びに行つたときにさっきの柳川で買った『風部落』という一冊の本を見せて「先生、これ持つてますよ」と言つたら「いやあ、若狭につくつてる水上文学館（一滴文庫）という所にも、この本無いですよ。どうしてこの本が柳川の果てま

で行つたんだろう」

「しかし悪い人の手に渡つたなあ。俺はまだ下手だつたんだよ、その頃は」「そう思いましたよ」と。(爆笑)

「元気を貰いましたよ。とても大事にしてくださいました」「それは沢山お金出さんと譲つてくれないだろうなあ」と、言うから「いやあ、いくらお金出したつて売れませんよ。その代りサイン入れて下さい」としたら

懐かしい本だが恥ずかしい——水上勉と、サインが入りました。貴重な本となりました。あれは柳川の国道橋のワキにあった本当におんほろの屋台の古本屋の懐かしい思い出です。

水上さんも数年前に亡くなられました。

何か、とりとめの話になりました、時間だけ過ぎて申し訳ありません。有難うございました。皆さん御元気で。

——終——

## 著書紹介

——多数のため、比較的最近のもののみ——

- 『老いの品格』 大和書房 一、六〇〇円
- 『老いを光らせるために』 〃 一、六〇〇円
- 『快老のスタイル』 〃 一、六〇〇円
- 『随筆・玉手箱』 三月書房 二、三〇〇円
- 『人は言葉に癒され、言葉に励まされる』 PHP 研究所 一、四〇〇円
- 『讃歌—美に殉じた人びとへ—』 玲風書房 二、二〇〇円
- 『金の人生銀の人生』 祥伝社 一、六〇〇円

——他 略——



## 略歴

### 松永伍一 (まつながごいち)

詩人。エッセイスト。一九三〇年、福岡県生まれ。文学・民族・美術・宗教など広範囲な論評で知られる。特に子守唄、農民史、キリシタン、古代ガラスの研究家としても著名。テレビ、ラジオの芸術番組等への出演も多い。『日本農民詩史』(全五巻)の大作により毎日出版文化賞特別賞を受ける。著書に『日本の子守唄』『荘厳なる詩祭』『天正の虹』『老いの品格』など著書約一五〇冊がある。

平成 17 年 4 月 1 日から平成 18 年 3 月 31 日まで

単位：円

科目	金額	科目	金額
収入の部		支出の部	
普通賛助金	2,597,000	会報制作費一式 (6号)	703,500
		会報送料一式 (6号)	184,742
		会報別途送料	3,250
		賛助金のお祝い制作費用	60,953
		同上送料	167,286
		伝習館同窓会広告料	40,000
		学年幹事会会議費	27,400
		学年幹事会会場費	5,200
		郵便振込手数料	40,380
		印字サービス料	6,080
当期収入	2,597,000	当期支出	1,238,791
前期繰越金	391,771	次期繰越金	1,749,980
合計	2,988,771	合計	2,988,771
		繰越貯金残高	883,870
		繰越現金残高	866,110

注・学年幹事会、会報編集委員会への出席者の交通費、飲物代等はすべて各員の個人負担でやっております。  
賛助金からの支出はありません。

平成 18 年 7 月 9 日まで

単位：円

科目	金額	科目	金額
収入の部		支出の部	
会費		案内状印刷及び返信はがき代	190,600
男性 161名 10,000	1,610,000	案内状発送費用	160,550
女性 62名 9,000	558,000	総会用印刷物他雑費	21,331
計 233名	2,168,000	松永先生講演謝礼及び車代	116,100
祝儀		懇親会費	1,640,472
横山校長他 3名	80,000	懇親会用地元清酒 48本	27,405
第56回同窓会実行委員会	30,000	来賓お土産 4個	6,804
計	110,000	参加者お土産	53,000
売店売上	240,000	(海苔のふりかけ 250個)	
		売店販売品仕入れ	169,000
		写真撮影・焼き増し	3,550
合計	2,518,000	合計	2,389,264
		収支	128,736
		(売店収益)	(70,548)

# 【賛助金ご協力状況報告】

平成 17 年 11 月 1 日から平成 18 年 11 月 30 日まで

卒回	氏名
高6	甲木康博
高6	古賀祥子
高6	中村充
高6	森清旨
高6	森時子
高7	大藪成人
高7	高田四郎
高7	田中絹佳
高7	田中絹佳
高7	森杲
高9	高橋口猛
高9	高橋雅子
高9	高橋雅子
高9	高橋悠紀
高10	江口武
高10	大島喜代子
高10	大淵静夫
高10	金納文子
高10	中村紀子
高10	東辰子
高11	久賀朝文
高11	原尻満子
高11	原尻満子
高12	馬場敦子
高12	深谷悦子
高13	成清謙爾
高14	今泉京子
高14	大境村サ陽子
高14	大境サヨ子
高15	井上妙美
高15	黒田夕工子
高15	後藤民子
高15	乗富眞則
高15	乗富眞則
高16	松延日出夫
高16	松藤賢一
高17	下吹越智佳子
高17	中島功
高18	石橋純一
高19	龍久美子
高20	近藤敬介
高20	相見るり子
高21	連尾秀智
高23	坂本真知子
高23	下田真知子
高23	光橋一美
高26	野口佳延
高27	松藤峯成
高28	石橋孝一
高28	石橋孝一
高28	中島真二
高28	吉開孝人
	福島たか子
	守谷由佳
	大城千代子
	尾崎カツ工
協賛0.5口	
中36	山崎年夫
中49	淡輪晋

(1口 2,000円)

卒回	氏名
高15	一木克子
高18	三小田国光
高24	山田直美
高30	川口文代
協賛1口	
中47	田崎英敏
中47	龍忠市
中49	松尾淳
中50	田辺一彦
中50	三山心栄
中53	木下憲男
中53	深町昌弘
中54	野口清二
中55	大坪薫
中55	馬場淳三郎
中55	吉弘尚正
中56	井関義久
中56	石川輝雄
女31	林チセ
女33	木下チヲ
女42	寺田ソエ子
女42	富重信子
女44	宝珠山福代子
女46	松藤良子
女47	小端ヒサ子
高1	高石満之
高1	高木陽二
高1	高林幹雄
高1	近藤藤紀
高2	大橋貞夫
高2	古賀苦住
高2	諸藤繁樹
高2	徳安朔子
高2	田中豊子
高2	増田則久
高2	松平隆子
高3	臼井ヒロ工
高3	佐藤宣夫
高3	酒井清行
高3	白井朗
高3	高山久吾
高3	長谷川千枝子
高3	藤木豊子
高3	柳澤一彦
高4	井上眞砂
高4	井上眞砂
高4	伊原典子
高4	山本瞳
高4	緒方常子
高5	倉林千鶴子
高5	酒井弘子
高5	高橋絹子
高5	武田八重子
高5	野口幹彦
高5	原タカ子
高5	松尾久子
高5	松永悦子
高5	宮川政寛
高6	石橋修
高6	井出眞
高6	井出由起子
高6	大坪セツ子

卒回	氏名
高2	廣松敏克
高3	今村繁隆
高3	富重眞一
高3	与田多美子
高5	中村千常
高5	中村義行
高6	服部尚子
高7	梅崎肇
高7	大津山砲三
高7	龍弘道
高8	池田孝人
高8	木下清佑
高8	樋口誠子
高8	樋口素子
高10	高口義勝
高10	松藤俊正
高11	野田三九雄
高11	山浦素明
高12	井上功夫
高12	井上功夫
高12	甲木宏明
高12	東若芳
高12	法坂純代
高12	小野アケミ
高13	田中利道
高16	水澤昭子
高18	十時理展
高23	樋口貴美子
高27	江崎友大
協賛2口	
中52	大内礼三
中53	浦川浪来
中53	吉岡昭三
中55	江頭芳郎
中56	松本一郎
高2	池田国彦
高2	辻三二
高7	松永泰輔
高7	宮地厚生
高8	本木寅三郎
高8	森健
高9	廣松洋一
高10	宇野良子
高11	石橋秀男
高11	樋口守
高15	小河良充
高17	宇木博巳
高19	芹川季代子
協賛1.5口	
中51	野田岩雄
中55	古賀昭夫
中55	金森隆茂
高3	西山彰
高5	家入智恵子
高6	中島常弘
高7	浜野弘子
高8	海部章
高9	池末安男
高9	原田光紀
高11	大坪ミドリ
高12	西中治子
高13	西雅治

卒回	氏名
協賛50口	
中41	高戸顕隆
高2	江崎正直
協賛25口	
高4	新谷弘実
協賛15口	
高19	野口昇
協賛7.5口	
高9	津留昇
協賛5口	
中46	前原弘
中47	徳永樹夫
中48	宮本弘道
中51	塚本和吉
中55	江崎和夫
高1	興田博利
高2	江崎洋二郎
高2	小野善睦
高5	江口政司
高5	大藪則子
高5	古賀弘
高5	田中禮二
高5	松永肅
高6	井上弘子
高6	江崎シズノ
高6	荻島直記
高6	戸上軍治
高8	川口融
高10	内山秀生
高11	徳永雄三
高13	原田万紗子
高16	梶島正司
高16	平野等
高17	大津正博
高18	平野令子
高21	白谷政則
高32	濱武久司
協賛4口	
高15	大村隆秀
協賛3口	
高4	塚本行平
高6	岡田哲也
高7	田中敬之助
高7	福山さくら
高17	森永正隆
高18	福山正彰
高20	福嶋豊
協賛2.5口	
中41	高戸顕隆
中46	下川忠
中49	堀江知教
中52	村上輝雄
中54	浅山親司
高伝1	梅崎俊行
女34	古賀弘子
女40	山田チヲ
女46	青木栄
高1	石橋哲夫
高1	北島良美
高2	石崎知見
高2	石橋慶孝
高2	上河京子

# 伝習館東京同窓会賛助金 振込票通信欄コメント

敬称略

## 高校12回 井上功夫

「くっぞこ会」の記事をのせていただきありがとうございます。「男たちの大和」を映画館でみてきて、涙、涙のいい映画でしたが大和の伊藤長官が伝習館出身とは又感激がこみあげてきました。

## 中学52回 村上輝雄

毎号有難く拝読しています。知らなかった大先輩は大いなる感銘をうけました。昭和20年の卒業式当日空襲警報下B29の編隊が柳河上空を北上し行列行進が中止となった往時が昨日のように思い出されます。中52回卒

## 高校17回 徳永正隆

仕事柄、海外出張で日本を留守にする事が多い日々ですが、会報を通し郷土柳川の動向を知る事が出来、幹事の皆様に感謝しております。

## 中学55回 古賀昭夫

新年おめでとう御座います、本年も宜敷く願います。伝習館東京同窓会々報第6号有難く拝読しました。伝習館には戦後四年生、半年間五年生、1年間と僅か1年半もの在学をしていないが、一家の食を支える「にわか百姓」をしつつ露語取得に代えて英語取得し

た青春の想出が御座います。叔父達(中学12回、同21回)母(女19回)弟(高21回)の関連あり。初代立花館長の思い出、松永副会長の「同窓会の歩み」に興味があります。

## 高校1回 北島良美

年とともに、柳川の6年間が懐かしくなつてまいります。現在はテレビで琴奨菊を応援しております。

## 中学56回 石川輝雄

「会報伝習館」有難うございました。寸志ですみません。75才になりました。年をとることのコワサがなくなりました。怠け者の、悔いだけの人生でもあるけど、人みな終着場所は同じたんも、ゆっくりマラソン、流れる雲、楽しもじやっかんも……。

## 高校6回 江崎シズノ

いつもお世話になりありがとうございます。江崎逸夫は病気のため平成17年3月19日になくなりました。生前のご厚誼に深く感謝いたします。ありがとうございます。

## 高校7回 大津山砲三

東京同窓会報お送りいただき毎回楽しみ読ませていただいています。「伝えておきたいことども」参考にになりました。

## 高校11回 山浦素明

会報にて懐かしきお名前をみつけて、皆様お元気と拝察し、一人

喜んでいきます。役員の方々お世話感謝いたします。

## 高校15回 小河良充

昨年定年を迎え12年余の単身生活もピリオドを打ちました。当面は仙台に落着きます。

## 中学48回 宮本弘道

おかげさまで元気にしています。立派な会報・幹事の皆さんのお努力に感謝します。東京同窓会の歩みは正しいと思います。雑音にまどわされる事なく、お精進下さい。

## 高校2回 辻 三二

江崎さん、お元気でいらつしやいますか、小生、体のほうはマアマアですが、モノ忘れがヒドクなつて参りました。娘が買ってくれた川崎大師様の「ボケ封じ」のお守りを大事に身につけています。江崎さんどうぞお元気で。

## 高校5回 中村義行

明けましておめでとうございませ。皆様方の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。皆様にとって本年も良い年でありますよう祈念します。

## 高校24回 山田直美

いつも楽しみに拝見させて頂いております。事務局様お世話様でございます。会報誌の表紙にびっくりでした。三柱神社の無残な姿が浮かんできました。本当に貴重な絵ですね。これからもこのような絵を(なつかしい)載せて下さい。

## 高校27回 松藤肇成

表紙絵の三柱神社を見て何かほつとするものがありました

## 高女34回 古賀弘子

御世話様です。

## 中学54回 野口清二

三柱神社の火災は知りませんでした。故郷は遠くなりました。高畑公園の満開の桜の下をいとこの福平さんや優ちゃん走り廻った幼いころが想い出されます。うつりゆく時みることに心なく昔のひとしおもほゆるかも(万葉集)

## 高校5回 酒井法子

高5回卒生です。編集の方々や幹事様のお世話ありがたく感謝しています。皆さんの書かれた記事は方言入りだったりして懐かしく読ませていただきました。

## 高校19回 野口昇

いつも懐かしく拝読させて頂いておられます。昨春、御花での婚禮の席につき、故郷の有難さをひしひしと感じました。

## 高校9回 廣松洋一

高校9回卒「むつごろう会」の会合で「さげもん」の写真を拝見、郷土にこんなすばらしいものがあったとは知りませんでした。あのきらびやかな現物を見たいと希望しておりますが、今年もその時期に帰れませんので、その日のための参考に2月末に伊豆河津の「つるし雛」を見に行く予定です。会

報発行の関係者の皆様に感謝しております。

## 高校16回 柘島正司

伝習館の歴史と立派な諸先輩に刺激を受けます。我々も負けずに頑張らねば!

## 高校23回 下田真知子

楽しみに読んでおります。新谷弘実先生の「病気になるない生き方」を読んだばかりでしたので同窓と知り驚きました。素人にもわかりやすく説得力があり、興味深く読みました。

## 高校11回 大坪みどり

会報はありがとうございます。子供の頃よく遊びに行った高畑公園の三柱宮が焼失したとのこと残念でなりません。

## 高校11回 野田三九雄

同窓会報をお送り頂きありがとうございます。第5号の先輩方の戦中記を興味深く読ませて頂きました。

①諸富爆撃の頃、塩川の土手の草叢に身を隠しつつ高畑方向へ逃げたこと。  
②住まいの曙町から塩川の川伝いにの橋をくぐり母の実家の材木町まで独りで歩いて行った時、ロッキード襲来(伝習館爆撃)に遭遇したこと。  
③大牟田空襲の後、焼失した叔母の家を見に行ったこと。  
etcは小生の幼児時代の空襲関係の記憶にも鮮明に残っています。

高校7回 大藪成人

会報第6号ありがとうございました。高1回の横山二三男さんの「この一撃で歴史が動く、喝だ！」の記事に同じ矢留小学校卒として状況が良くわかり、思わず笑ってしまいました。

? 福島たか子

三柱神社の火災、「大和」伊藤提督が大先輩だったこと、伝えておきたいことも等々興味強い内容ばかりです。総会の早めの通知もとても良いと思いました。

? 守谷由佳

原田様 早々に同窓会に加えていただき、ありがとうございます。お目にかかれる日を楽しみにしております。(富重忠夫の娘)

高校6回 中村 充

今冬は札幌も雪が多く、毎日午前午後の2回「働きに行つて来ます」と声をかけ、家の周りの除雪に励んでおり、体調も万全です。毎日食も酒もすすみます。

高校2回 廣松敏克

会報第6号楽しく拝読いたしました。年2回の発行の目処がたち大変嬉しく思っております。会員の皆様のお力で東京同窓会の益々発展することを祈念いたします。

高校6回 井上和子

御世話様です。最近、年と共に出不精になって2匹のネコと共にボール投げ等して遊んでいます。

これが又夢中になるので我ながらおかしくなります。

高校15回 一木克子

会報毎号楽しく読ませてもらっています。故郷の友人や知人の記事がありました。帰柳の所に友達にも見ていただきたいと思っております。編集の方々に感謝します。

高校7回 松永泰輔

会報発行ご苦労様です。北原鹿次郎氏が高校の先輩とは、始めて知りました。又大荒という字に懐かしさを感じました。

高校2回 松平隆子

同窓会会報楽しく読ませていただいております。母が入院したのを機に毎月2・3泊で見舞っておりますが、柳川の町並みの変わり様にびつくりしております。会報を通じてなつかしく思っています。編集される皆さんありがとうございます。御健勝をお祈り致します。

高校7回 宮地厚生

編集部の方のご苦勞に感謝しています。毎号楽しく読ませていただいています。進路実績だけでなく、今の母校の様子を紹介する欄があるのもっと楽しいと思えますがいかがでしょうか。

高女42回 富重信子

三柱神社の火災の件を聞いて驚いていましたが、なつかしい表紙は三柱神社の楼門でありありがとうございます。生まれて80年・一等等なつかしい場所ですから、藤吉

小学校の運動会など桜の花を幼いころはもっともっと盛大に想いだしますよろしくお願ひ申し上げます。取り込んでおそくなりすみません。

高校2回 江崎洋二郎

筑紫野から遙かに東京の皆みな様のご発展を祈つて。

高校5回 大藪則子

いつも会報を有がとう存じます。立派なので簡単に処分出来ず並べています。前のを又取り出して読んで、目に入って来るのが又新しく読むことが出来ます。次回はどんなものがと心待ちにする様になりました。

高校27回 江崎友大

会報で伊藤整一氏の「戦艦大和」他先輩方の偉業興味深く読ませていただきました。

高校11回 徳永雄三

昭和35年卒、11期 東京の伝習館35会仲間がドンドン減っております、新規仲間歓迎します。

高校6回 森 清旨

御無沙汰致しまして申し訳ありません。江崎会長初め幹事の皆様にご多用中、母校伝習館東京同窓会にご尽力頂き、只々感謝の念でいっぱいです。小生、104才義母の介護に追われる日々ですが、何れ、同窓会の皆様にお会い出来る日を楽しみにしております。よろしくお願ひします。

高校7回 伊原典子

同窓会報をお送りいただきありがとうございます。会報を手に入れますと、柳川のことを思い出します。なつかしいことです。

高校7回 浜野弘子

同窓会報、なつかしく拝読致しております。いつもお世話様です。遅くなりましたが賛助金お送り致します。次号楽しみです。

? 尾崎カツエ

いつもお世話さまになります。

? 大城千代子

両親が長い事、お世話になりました。父 大城二男 第26回伝習館(85才と4か月で永眠 母 大城俊 高女26)(95才と4か月永眠)私は娘で会報を楽しんで読んでいます。



# 東京に輝ける三稜の星たち

「東京同窓会」の歩み—その7—

副会長 松永 肅

古賀繁一氏が昭和54年6月に東京同窓会の会長に就任されてから同窓会への思い入れは次の業績に如実に現われております。ご就任期間は実に10年間に及びました。

この間の業績をつぶさにご説明しますと、時間を要し、またページ数の関係もあり残念ながら代表的なものに絞らせていただきます。その一つに昭和62年7月18日(土曜日)に千代田区大手町の日本経済新聞社の中にある日経ホール(約一〇〇〇名収容)で催された記録映画「柳川掘割物語」の映写会が挙げられます。それは会長が自費で同窓生をはじめ在京の皆んなを対象に催されたもので、ホールは満席となり立見まで出来たほどでした。

この年の4月のはじめに、高校時代の同期である永江秀作君が突然私の勤め先を訪ずれ、世界的に有名な動画面巨匠で、「風のなかのナウシカ」を発表された宮崎 駿監督が「柳川の掘割から水と都市と人間」の深い関わりに興味を持たれ3年にわたる取材とロケを経て完成をみた貴重な記録映画が近く東京でも放映されるため、在京の柳川出身の人達に是非とも鑑賞してほしいと思う。ついでに、これを伝習館東京同窓会の方々に紹介してみたらどうだろうか、との相談でありま

した。直ちに古賀同窓会長の、了解を頂くため永江君に出来るだけ資料や情報を集めてほしい旨の依頼をしました。

この間に古賀会長から、別件で呼び出しがあり、執務室に伺った折りに「柳川掘割物語」が完成・近日一斉放映される旨報告し、併せて友人の永江秀作君の熱心な勧めもあったことも報告したところ、会長も興味をしめされ、君のところへ検討するようにとのご指示を受けました。

早速永江君に本格的な資料や情報集めに取組んでもらいました。永江君の尽力で、この年の5月29日(金曜日)午後5時45分から銀座のガスホールでこの記録映画の試写会が予定されている情報が入り、資料も集まったところで、次に催される5月18日(月曜日)の「みろく会」に永江君の同席を依頼し古賀会長に詳しく説明してもらいました。

数日して会長から直接お電話いただき、ご自分も「柳川掘割物語」の試写会を観賞したいので手配してほしいと要請がありました。当日、三菱重工工業本社まで出向き、会長のお供でガスホールに赴き、一緒に観賞させていただきました。作品が記録映画の為か放映時間が休憩を含め4時間15分に及びましたが、会長はお疲れのご様子もなく、身じろぎひとつ

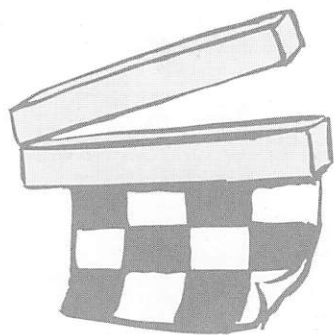
なさらず最後まで興味深そうに観賞しておられました。

翌週、会長からの要請というところと秘書の方から都合のよい時に来社して欲しい旨、電話をいただき赴きますと、会長は「掘割物語」に大変な感銘をうけられたご様子で、「君も試写会を鑑賞して感じたと思うがこの映画は、現代の主眼である河川浄化と環境保全等水行政、環境行政、都市行政等に関する今の人々にも多くの示唆を与えてくれた大作であった。この映画は伝習館東京同窓会の皆んなに是非とも鑑賞して貰いたい。ついには適当な場所を貸し切り無料で催したいと思う。費用は全額僕が負担するから、「映画鑑賞会」の企画を練って欲しい。但し僕が費用を負担することは絶対に口外しないで欲しい。」とのご指示でありました。

直ちに永江秀作君に連絡し、時間的な余裕が取れない為、取り敢えず二人でたたき台となる「企画書」の作成に取りかかりました。これが大仕事で会場の確保・観賞者の集客数・開催日時・案内状発送名簿の確保・案内状の印刷・筆耕・郵送・映画フィルム、映写技師の手配・当日の会場受付、案内係の手配などに総額概算費用を算出いたしました。

これを基に、二人で手分けして、永江君には会場や記録映画関係、私は観賞者への案内・会場係などを所持し項目ごとに費用などを積み上げ、数日の内に「企画書」に概算費用を含めて、古賀会長に提出し、詳細に説明させていただきましたところ「企画書」をひと通り賢察

されたあとに、会長から「非常に良く出てくるがこの他に思わぬ出費も予想されるから、あと20万円拠出するのでこれを加えて準備して欲しい」とのご指示を受けました。そのあと、ご自分の机から紙と鉛筆をお持ちになり、その場で試写会の案内状の原稿をお書きになり、「これでご案内するように」と言われて手渡されました。これを拝見して、私は古賀会長の記録映画「柳川掘割物語」に対する思い入れにたく感じりました。これは迂闊な気持ちでは準備できないと緊張すら覚えました。この案内状の文面は格調高く短い文章の中に記録映画の制作された目的と意義が示唆されておりますのでご紹介させていただきます。



## 記録映画「柳川掘割物語」映写会の御案内

初夏の候、皆様におかれましては御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび福岡県柳川市の掘割と水をテーマにした記録映画『柳川掘割物語』が、3年にわたる取材とロケを経て完成をみました。

すでに、多くの新聞等で紹介されておりますが、本映画は「水と都市と人間」の多様で深い関わり合いを、柳川の掘割の形成から疲弊そして市民と行政の連携により再生運動にいたるプロセスを通して見つめ直した名篇です。

白秋を生んだ柳川の心なごむ水郷の情景はもとより、その背景にある壮烈な水争いの歴史、動力なき時代の治水、利水の偉大なるシステム、そして主題である河川浄化と環境保全等水行政、環境行政、都市行政等に関係する今の時代の人々にも多くの示唆を与えてくれます。

今般、本映画の試写会が左記により開催されるにあたり、主催者のご好意により広く関係行政機関の方々にも鑑賞の途を開いていただきましたので、是非お誘い合わせのうえ御参加下さい。

### 記

1. 日 時 7月18日(土) 13時30分(開場)～17時  
(14時より上映、途中15分休憩あり)
2. 会 場 千代田区大手町1-9-5  
「日経ホール」 (☎270-0215)  
地下鉄丸の内線 大手町駅 A1下車すぐ  
地下鉄東西線・千代田線  
都営三田線 大手町駅 C1出口より徒歩5分
3. 入場料 無 料

伝習館東京同窓会

会 長 古 賀 繁 一

(三菱重工相談役)

以上の文章で皆さんに案内させていただきます。

これだけの準備を進めるには永江君と二人では勿論不可能なことであり、先に会長のご意向が定まった段階で、平生、東京同窓会総会等で、いろいろ協力をお願いしている諸先輩・同期生をはじめ若い同窓生にもいつもながらのボランティアでのご協力いただきました。

特に東京同窓会の会長補佐役的な役目を果たされておられた古賀義利氏をはじめ浅山親司、江崎和夫、増尾義勝、田中禮二、沖美津正、金子誠也の各氏に、また当日の会場受付や案内を私の同期生や金子氏の同期生に大変な協力を頂きました。

当日は、ホテルグランドパレスで、昭和27年11月から毎月欠かさず開かれている408回目の「みろく会」が開催されましたが、古賀会長のご意向で早めに切り上げその足で出席者全員が揃って会場に向きました。

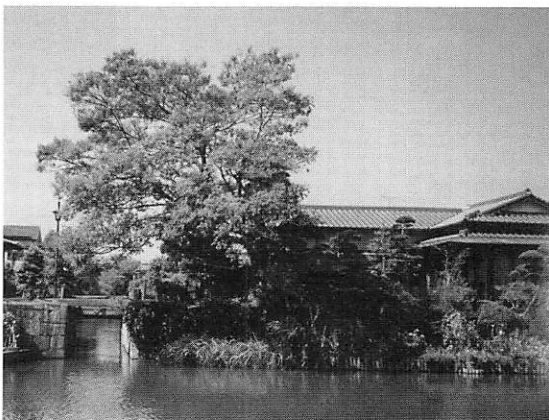
当日はどれだけの人数が集まるか皆目見当がつかず、人数が600名位集まれば成功したもの思っただけで、会場に集まった人数の多さに戸惑いました。故郷を離れて、故郷を想い、故郷が栄えることを願う気持ちは皆んな同じであると

の感慨を覚えました。

会場には、多数の行政の関係省庁の担当の方々や、また伝習館の同窓生のほかにも噂を聞いた同郷の方々にも多数観賞いただきましたので、この催しは大変好評を博しました。

二つ目は、昭和63年11月に母校伝習館のサッカー部が翌年の1月2日(火)から8日(月)までの7日間、東京の国立競技場を中心に第68回全国高等学校サッカー選手権大会に出場が決まり、この快挙に地元柳川は勿論のこと、在京の同窓生も沸きに沸いて早速東京でも同窓生をはじめ関係者が一つになって応援体制を敷き、また選手の受入れ態勢を作り上げたことだと思えます。

この情報もやはり永江秀作君からもたらされました。詳細につきましては次回にお伝えさせていただきます。



旧、鋤先土居の水門  
水門を川舟でくぐると沖ノ端までの掘割が続く

修学旅行はこの二十年來、四泊五日のスキー旅行と決まっています。今年からは全く内容が一変し、東京だけに滞在して研修する旅行に変わりました。去る九月五日より三泊四日、文化施設や大学を見学し、有益な見聞を広める内容に改善されたことは大変喜ばしいことであります。それに加えて、一晚、同窓会先輩との交歓・交流会も実現しました。修学旅行生は六クラス、同窓会からは学年幹事を中心に三十名が出席しました。

これまで東京同窓会が一日お世話する夜の部で、講演会のあと、生徒と先輩が車座になって話し合うことを提案してき



ましたが、ホテル側から部屋がないとの理由で断られていました。今回、江東区のホテルイースト21東京で初めて、車座とまではいかないまでも、クラス別に生徒と先輩との交流会が実現したことは大きな前進で、画期的なことであり有意義なことです。

結論的に言えば、講演会六〇分のあと三〇分という生徒との交流は時間が短すぎたこと、特定の者（先輩）が長く喋りすぎて生徒の話す時間がなくなった組み合わせもあつたこと、が反省点です。

何事も初回というのはうまくいかないもので、何回かやるうちに試行錯誤の中からより好ましいやり方を見出すことができます。今回の交流会で、生徒の皆さんが先輩と向き合って直接話すことを通して同窓会意識を実感し、この企画に興味をもったことがわかりました。来年からは会長、副会長の講演を止めて、クラス別交歓会一本で行くことを検討したい。発言者には時間制限を設けて、特定の者だけが長話をするのを避ける。一人でも多くの生徒に発言する機会を与えるようにしたい。生徒の希望や質問に応じて、先輩は自分の経験や知識を語り、生徒はそれを参考にしてその後の人生に生かすことができます。

「聞くは一代の恥、聞かざるは末代の恥」と諺にあるように、生徒は恥ずかしがらずに何でも質問するようにしてほしい。

そうすることによって生徒の同窓会に対する認識が深まり、生徒と先輩との親睦が進むこと請け合いです。これらの生徒たちに次世代の同窓会を背負ってもらわねばなりません。

人生は経験が大切です。いろんな話を聞き、自分で経験することによって成長し、失敗を未然に防ぎ、人生を効率よく生きることができそうです。

これは東京同窓会側から見た反省意見です。学校側からも意見を出していただき、先生や生徒の皆さんの希望を入れて、来年はもっと捻りのある交歓会にしましょう。



## 伝習館修学旅行グループ懇親会に

ご協力頂いた皆さん 敬称略

- 中学55回 江崎和夫
- 高校1回 増尾義勝
- 高校2回 江崎正直・小野善睦・古賀苦住・平河智
- 高校3回 酒井清行・志牟田徹
- 高校4回 荒井健之助・倉本博子・丸勢正夫
- 高校5回 岸栄洋・松永肅
- 高校7回 田中敬之助
- 高校9回 石橋淑子・原田光紀
- 高校10回 内山秀生・永倉素子
- 高校12回 小野アケミ・溝口晴夫
- 高校13回 原田万紗子
- 高校14回 石橋俊一
- 高校19回 芹川季代子
- 高校20回 近藤敬介・高巢和登
- 高校21回 白谷正則
- 高校23回 坂本智臣



# 先輩・後輩より

## 我が中学「伝習館」

中 41 回 高戸顕隆

私は、中学「伝習館」卒業後、福岡高等学校、を経て、昭和十六年十二月末、京都帝国大学経済学部を卒業し、翌十七年一月、海軍短期現役第八期生として、海軍主計中尉に任官し、駆逐艦、「照月」の主計長として、南方第一戦に赴き、「南太平洋海戦」「第三次ソロモン海戦」「ガ島食糧輸送作戦」に従事しましたが、昭和十七年十二月十一日、「照月」は敵の魚雷艇により、ガダルカナル島沖で撃沈され、私は九死に一生を得て帰国し、大本営海軍報道部に二年間勤務し、やがて終戦を迎えました。それから五十年の歳月が流れました折、戦場で散っていた多くの戦友が忘れられず、彼等の慰霊の意をこめて、一九九四年十月、「海軍主計大尉の太平洋戦争」なる一文を書き、更にその文庫本が、一九九九年に発刊されました。

これを期に、私の戦争体験談を要望する声に應え、各方面でこれまで百回を越す講演をして参りました。私の講演は、「鎮魂の祈り」でありますので、如何なる報酬も、旅費、交通費も受取った事はありません。これからも生ある限り講演を続けたいと思っています。

自己紹介が長くなりましたが、私の中学伝習館について語りましょう。

私は家庭の事情で、高等小学校一年から入学しましたが、二年生になった時、中学をやめなければならぬ事態に追い込まれました。

それを救って下さったのは、担任の年若い東大出の森永種夫先生（後年「長崎犯科帳」を書かれた）で、ある家の学友として、そこに住み込み、学業を続けられるようにして下さいました。その後、高校も大学も家庭教師と奨学金で卒業したのです。

この中学時代に書いた私の文章「水郷」が伝中学報改第十二号に載っておりますので、そのコピーを御送りします。

私の同級生には、俳句の巨匠「小野麦村（本名温）」がいて、句集「冬銀河」を出し、又短歌の巨匠、本村正雄は、「笹丘の径」を出版しましたが、小野は私の本を読んで、

- ソロモンを思えば銀河濃かりけり
- 大南風に艦が沈みし海の色

とうたい、アララギ派の歌人本村正雄は、

- わが知れる艦のごとく南溟にしずみゆくさま息呑みて読む
- 漆黒の海に木の葉と漂いて生命生きたり何と言わむかも
- 火達磨となりて艦沈みゆく戦記五十年

を経て胸迫り読むと歌いあげてくれました。

又、たゞ一人海軍兵学校に進んだ梶島千蔵とは、ソロモン海で共に戦った戦友ですが、彼が努力して集めてくれた戦争資料が私の本の詳細を生み出してくれたのです。

又、東大工学部を出た志岐武司は、大成建設（株）の技術部門の頂点に立ち、NHK等にも出る偉大な技術者となりました。

併し、今生き残っているのは小野温他数人となってしまいました。

中学伝習館は私にとって心暖まる故郷なのです。

以上



## 水郷

あさ

四ノ三 高戸顕隆

静かに——丁度狭霧が降つてゐるとき  
のやうに——音も立てず、夜は明け離れて  
行つた。

清水川の輪廓が——蝙蝠の翼に似て  
——一際スツと隈どられたかと思ふ間に  
絹糸に磨きをかけた様な——白金の細粉

を振り撒いた、それとしか思はれぬ陽足が山の葉緑樹を總毟めにし、田へ畑へ、一軒家の櫓先へ——流れて行く、走つて行く……脇目もふらずにそして其の光東（ペンシル・オブ・ライト）は、見る／＼擴がつて、田を渡り、河を渡り、丘を越えて——盡くる處は、模糊として、幾億かの光點の集合の様に——果ては空一杯、地一杯の……「夜明け」を齎らした。

一番鶏の聲、遠寺の鐘と和して時を告ぐれば、陽光頓に加はり、燦々と降つて筑後平原は——美しい……輝ける——天國を象徴するやうに、草も木も、そして河も田も、全ては光に充ち溢れて、うらかな、そして又長閑な……「水郷の朝」……が訪れて来たのだ。

## ド迫力！ 大満足！

よかやっかんも（第4弾）

じくどる教員たち

高1回 横山二三男

そうら、突撃じゃ！

森山は蓮池をジャンプして「へそくり山」へ猛ダツシユ。やってやり放しのダダ走りだ。

はよ来んか！

ふり返つては後続の三人にハッパをかける。へそくり山の頂上にたどり着くには急な螺旋状石段を三回転、ぐるりと廻らねばならぬ。誰でも往生する難路だ。迷路だ。

その二百メートルの登り坂を森山は手ぶらだから身軽だ。後方の私たちはそれぞれ重荷を背負っている。

北原は食糧、古賀は一升瓶、私は食器など。ハーハー息をはずませる。

地域住民たちが俗に云う「へそくり山」とは柳河城跡のこと。永祿元年（一五五八）ごろの築城というから、築四百年をゆうに越している。

史料によると、川と堀と湿地帯に囲まれた平城で、大自然が要害となった難攻不落の名城だったらしい。

さすがトンさんだ。

領地四郡、百九十六村、十三万二千八百二十石の藩主、立花宗茂の居城である。

控えおろう！

頭が高い！

その柳川城が明治五年（一八七二）一月十八日夜、出火原因不明の大火災のため、天守閣もろとも一夜にして消失してしまつた。

ホンにもつてなか話です。

中学伝習館の一部低学年生たちは、その天守閣跡を根城に遊びほうけていた。

巷では「欲しがりません、勝つまでは」(We don't want any until we win) などの戦の末期的スローガンがはびこっていた時代である。

へそくり山の頂上は円形に鉄パイプが

めぐらされ、イタズラ坊主たちの落下を防ぐ危機管理が徹底的に施された安全地帯。

だが、直径二メートル弱の厚いコンクリート造りだから、この四人がどぐる巻けば身動き取れないほどの狭さになる。

満杯状態になりながら標高三十メートルの頂上から町の火を展望すりや気分爽快、ストレス解消の別天地の感がする。

「ヨカ気持ちバイ、横山！」

大将格の森山は深呼吸して胸を張る。

「やかましカ親父たちがおらんけんヨカ」

北原は「障害物？」がいないのを喜んだ。

「こ、なら藪蚊にも刺されんしネ……」

古賀は蚊の大群の来襲を避けられたことを感激している。人いろいろだ。

四人は校則から逸脱した番狂わせの酒盛りに乱舞して舞いあがる。

「そろそろゆこうぜ！ いっちよやるか！」

森山には気合いが入った。テレビもケイタイもカラオケもない時代の青年たちにとつてせめてもの娯楽といったら大空に向けて腹の底から大声張りあげて唸るくらいが関の山。

テンションがあが上った。

「柳城が丘からのうえ、柳城が丘からのうえ、柳城がサイサイ、丘から杉森見ればコエタゴ担いでのうえ……」

当時流行した「のうえ節」。実に単純で他愛ない原始的なリズムで歌い出す。

他校を罵倒する歌は感心できないが、生徒たちが寄り合うとかならずこの歌が

飛び出し、対抗意識をあらわにしていたのは不思議だ。

ちなみに黒いサルマタは柳河高女、鉄砲かつぐのが伝習館になっていたが、眼下の柳河商業をどう表現したのか忘れてしまった。

仲間では優れ者のミュージシャン、古賀は手拍子た、いて正調の喉をみんなに披露する。なかなかの役者だ。

「つとせいえ、人もよく知る伝習のじくどる教員の数え歌」

そいつあ、ゴキキだね

そいつあゴキキだね

「伝習館の書生さんに惚れん奴あ奴あホイのバイスラキンのキン、柳河高女の売れ残り、それもそうかい、こうかいバイスラキンのキン、バイスラキンの横ベイベー……」

歌い出せばもう止らない。そのコミカルタツチにみんなの笑いも止らない。

酔いが回り、毒気が抜けると次の行動に移る。醤油屋の長男の森山と炊き物屋の次男の北原は隣同志の間柄で呼吸がピッタリ合う。

「ようし！ 降りよう！」

一気に山を駆け降りる。グルリ回転しながら急な坂道をスピードに乗って急降下だ。

「大学さん」に入る細道を左に折れると御花だ。白谷八百屋前から堀に沿って一直線、目指すは安永薬局前の水天宮である。

車は通らない、人通りもまばらな夜道を四人は夢中で走った。

森山はいきなり社務所の裏の土橋が



左上が水天宮。ここは絶好の遊泳場だった。(H. 15. 10. 現在)

ら、ドボーン）  
垂直に足先からの「がめ入り」する。  
ついで北原も頭から、  
ドボーン）

二人ともフルチン、水しぶきを立て、  
泳いでいるのに橋のたもとの駐在所から  
中嶋巡査が飛び出して来ない。なんで？  
いまのギスギスした時世とちがつて、  
大人たちはこんな海の子たちのいたずら  
を大目にする心の豊かな時代だったこと  
に真違いない。思いやり (thoughtful-  
ness) があつた。

岸へ上ると、二人はズブ濡れのまま、鳥  
居をくぐり、鈴を鳴らして神殿にぬかず  
く。

一札二拍二札  
神妙に頭を下げる。

「水天宮さん、水天宮さん、どうか御免

してハイヨ」

自分たちの無謀さを謝罪し、非を懺悔  
して居るじゃありませんか？ そのユーモ  
ラスな仕草に私と古賀は腹をか、えて笑  
つたもんだ。

殺伐とした世の中でも子供たちは遊び  
を自ら創造して生活をエンジョイしてい  
たもんだ。ヘタなお笑い芸人の笑いより  
ずっと面白かつた。

伝習館の創立は文政七年（一八二四）  
というから歴史の古い学校なんだとい  
まごろびつくりしている。

その長い歴史のなかでそれぞれの時代  
を築いたじぶんと先生を排出したにちが  
いない。

われら戦中・戦後をまたぐ学校生活の  
なかでもユニークなキャラクターの教師  
がたくさんおられた。

少し紹介してみよう。

断つておろが、文中に禁止用語があつ  
たり、個人を侮蔑するような表現が出る  
かもしれない。しかし、まなざしの奥に  
友情あり。楽しい思い出話だとして一笑  
に付していただきたい。

まずはランキヨ（辣韭）の登場だ。

見るからに気むずかしそうな男だ。怒  
りっぽい。気に入らぬとやたら生徒をブ  
ン殴るので往生した。気分がい、と歯を  
むき出して、

ケツ、ケツ、ケツ：

と、奇妙な笑い声を発する密林の猿みた  
い。

図画の授業中にきまつて職員室へ戻る  
習癖があつたので早弁組は助かつた。退  
席中の自由時間を楽しませてもらった。

「あら、煙草喫いに行つとると…」

離室の事由ははつきり分つた。

それは忘れもしない木枯らしの吹き荒  
れる二月上旬のことだつた。

受験生たちは吹きざらしの通り廊下の  
座板の上で長時間順番を待たされた。筆  
記試験の終つた最終日の口頭試験の当日  
のこと。

入れ！の合図の赤旗が重い扉の教室の  
上にピンを張つてあがつた。教師がタコ  
糸を引くのだ。入ると、前面の細長いテ  
ーブルに三人の教師が退屈そうに並んで  
いた。

私が中央の椅子に座るなり、右端の小  
男がニタリ、

「おう！ 日蔭ボーブラがお出なすつた  
ぞ！ ケツケツケツケ！」

と、奇声をあげる。私の真白い肌を日  
の当たらない所で育つたカボチャだと揶揄  
するじゃありませんか？ 私の血の気が  
騒いだのは当然の話。カーツとなつてキ  
レてしまつた。

「なんだこのクソジジ！ チャモ！  
…」

猛烈に反抗した。柄の小さなチャボめ  
と罵ると、ジジもキレた。質問そつち  
のけで私を追いかけてくるじゃありません  
か。

廊下に出て二人が追いつ追われつ捕  
物帳がはじまる。その熾烈な攻防戦に周  
りはアツ気にとられ、口頭試験は一時中  
断された。

こんなこととして『合格』するわけがな  
い。私は一年間、高等小学で冷や飯食わ  
される破目になる。私の落第が信じられ

ないと語つていた恩師の松石、花田両先  
生にこの真相を語らずじまいになつたの  
はとても残念である。

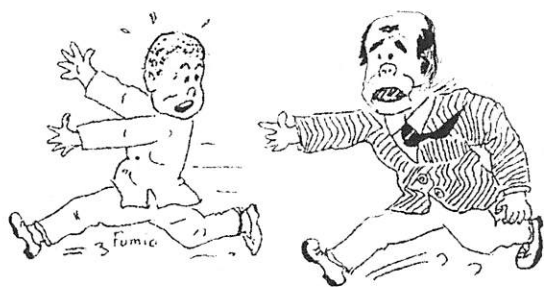
両親が死ぬまで私は真実を語らなかつ  
た。

翌年は正規の入学、ラッキョと授業で  
再会できた。私を見るなり満面の笑みで  
迎えてくれた。あの日のことを鮮明に記  
憶していた。

その怒りのラッキョが卒業するまで私  
を可愛がつてくれ、殴るところか、通信  
簿にはトップ点の『秀』を記載してくれ  
た。

そしてツンさんとも協議のうえ週番長  
（級長）を命じてくれた。いまも解明で  
きない謎だらけのラッキョこと服部先生  
だつた。

ガッツはスツ頓狂な男だつた。  
生物学教師というより、屋外での農作  
業を主体に肉体労働するおじさんといつ



ランキョに追われる 口答試験

た方がピツタリ。

大川市の繁華街で下駄屋を開業していた多角経営者でもあった。彼には危いクセがあり、手に持っている物で生徒をつぱたくので困ったもんだ。ノート・ホーキ・鋏・スコップ・ペンチにいたるまで使いこなす荒業の持ち主。まして珍妙きわまる言動には生徒たちは閉口していた。二・三例を挙げてみよう。

集団で登・下校する学生たちの一群に向い、「オイ、オイ、その前の二人は何人か？」とくる。

掛けられた方は当然口をあんどり開けてしばし哑然とする。クスクス笑い出す。と、ガツツはわけもなく竹ボウキで笑った奴らをたく。なんで？ よく考えてみよう！ 二人は二人だもんな。まったく殴られ損となる。

自分では何年生か？と聞いてるつもりなんだろ。

勤勞奉仕の生徒たちを前に、ガツツは一席ぶつ。得意気に偉そうな態度をみせる。

「オイ・オイ・今日はこれから雑草の草を取る！ 方々の一個所に集める」という。

生徒たちは（またか？）といった感じで笑うがガツツはマジな顔して笑う集団に攻撃をしかけてくる。たまったもんじやない。

雑草と草は同じだし、方々の一個所と云われてもどうしていいのか迷ってしま

う。「オイ・オイ・ただいまから麦の稲刈りをする」ときた日には腹が痛くなる。生

徒たちが笑いこけているとガツツのきつい一発が見舞われる。奇妙な授業だった。

ボンさんは近くの古寺から通学する国語の教師。背は高く柔和な顔付き。誰もが慈悲深い僧侶だと感じてたが、事実は小説よりも奇なり。私はクラス中でも目の敵みたくに連打された。書けないほどのおし置だった。私みたいな反骨精神旺盛で命令に従順でない子を嫌ったんだろ

う？  
ブライは剣道の師範。学校の裏門の傍に自宅があつた関係で、下校のときはテニスコートバックラインに沿ってノタリノタリ帰っていた。蟹が泡吹くかのよう

にブツブツ呂律の回らない独り言云いながら。  
意味不明の言葉をついて稽古をつけるので生徒は一向についてゆかない。馬鹿にして相手にしない。私の従兄弟の古賀俊郎君は天敵扱いにされ、わけもなく竹刀を振り回しながら追いかけていたのが可愛想だった。

マーしゃんは物理の先生。  
と、いつても授業らしい授業はまったく滑らか。得意の弁舌で語り口がとても滑らか。得意の弁舌で生徒たちのマインドをあざやかに調整しては人気を集めていた。退屈しない授業に。本業の魚屋の話になると止らない。学問としての中味は薄くてもその自由奔放で型破りな話術に若い者たちが魅せられたんじゃないだろうか？

ジユウタンは漢文を担当。  
重箱のような四角い顔、背筋を伸ばしてオクターブの高い声を発しては教壇の

上から生徒の動きを入念に観察していた。「おーい！ その山田あつ！ 出てこい！」

最後部の席まで通る声だ。早や弁はおろか居眠りもま、ならぬといったチエック態勢をとる。得意業を持っていたな。ホントに。

先生の直下で直立姿勢のま、立っている山田の脳天めがけて、四角い小さなチヨーク箱の蓋をタテにして一撃を見舞う。

痛えっ！  
てなもんじやない。当り所によっちゃ失神するかも？ 彼の遊び心で加減していたかも？

冬期の早朝の校庭で全校生徒を集め裸の天突き運動や乾布摩擦を励行した。筆絶剛健。な男でした。

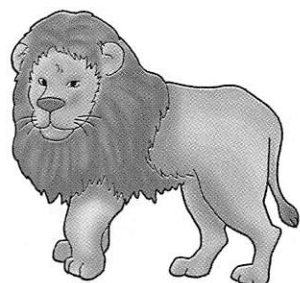
わが家のすぐ近くに住んでおられた関係か、私の頭上へは一度も「木拳」が振り下ろされなかったのは幸いである。

ダットサン・トンボ・ガツツが三代続いたテニス部部长だったとは知らなかった。

上記二人はともに小柄で国語教師。ダットサンは色白でハンサム、トンボは陽焼けで温厚。気性の激しいのと温和なのと二人の国語教師と私は部活をともにした。

「あれはな射精のとき小便するらしい」先輩たちは面白がって見たようなウソ話をしていた。女房がよく替るだろう。そのせいだよ。ブライバシーの侵害もはなはだしい。

わが恩師のエピソードを書けばキリがない。あの時代の教師たちの共通している教育理念というものは第一に子供たちを甘やかさないで純に育てること。  
そして、ライオンの子育てのようにわが子を千尋の谷へ突き落していたのであると信じて疑わない。



つづく。

## 柳川サン イタテ来たバンモ!

女 47 回 作山ミツ

「もう最後のクラス会ゲナ！」

というふれこみが入って来たケン、ドゲンシタツチャ帰らヤコテ!と決意したツが去年のこと。三月には安カ切符の手配バして、希望通り切符が買えたときに

は嬉しくて、その日のうちにトランクに旅行の用意バシてしまい、二カ月前に出発と聞いた夫に「ヒエーッ」とあきれられたタンモ。

初めて同期会に出る！…この興奮は日毎に昂まり、その日まで病氣バセンゴツ、うっかりその日は寝坊センゴツ、そればかり心配になって眠られん夜もあつたりして、身体が持つツジャカと思うた位。

そして遂にその日が来た。先ず若力（高畑の料理旅館）で茶話会、夜来られ召サン方々のお出で召したタンモ。女学校卒業以来の方々もあつて「バイーッ」テン「オロー」テンの連発。懐かしユウテ後の言葉の出ランじゃつたタンモ。

「元気でオリ召したカ？」  
「ゾータンノゴツ、こげんご無沙汰バシてしても、ごめんしてハイリヨ」  
「こげん寄つて呉れ召して、オイテキナカ」  
「ごめんし召せ」

すぐわかる方々と、中々コンチヨカ時と結びつかんお顔もあつて、数十年の月日の経つとることに思ひの至つたバンモ。

夜の食事会も又新しカ方も見えて、賑オウタタンモ。  
クツゾコ、アゲマキ、ウミタケ…テン懐かしカ柳川名物の並んだコツじゃつたバンモ。

頭中のガンガンして、ボーッととなつとつたゴタルモン。ヨートト今、こまごま思ひ出されんタンモ。

ホンチャンな福岡のソラリアホテルで

あつたモンノモ。柳川の方の、田舎モンのアタイバしつかり福岡まで連れて行つてくれ召した。

福岡は私の住んでる逗子より大都會ジヤン。私人ならドゲンジャツタロカ？ ツンノテ行つて良かった。正解じゃつた。会場にはもういっぱい来トリ召した。

「ミツちゃん！」  
何人かの人に声をかけられた。珍しカお顔の何人デンおり召した。何十年いや六十年近く会わなかつた方々もいっぱいおり召した。

「あけてぞ今朝は別れゆく」と歌つたその日から、ホンナコテ再び会うことはなかつた！ その間にお互いどんな月日を過ごしたか、そして今日の再会、夢ンゴタル気持のしたバンモ。

若いときは何も考えず、傍若無人に生きた私。年とつて考えたら、みんなに「アン時はゴメンシメセー」と謝りたいと思つたのに、ナンデン許してくれ召して

「ミツちゃん！ 元気で良かったー！」  
と、喜んでくれ召した友達の有難さ。受け入れて貰うた嬉しさに身体中がヌークなつて泣コゴタル気分になつたバンモ。

ダッテンが「歌ワンネ！ うたわねえ！」チ私バおだてて、とうとう担ぎ出されて、ゾータンノゴツ、何十年ぶりにステージに上がつて、出ん声バ振り絞つて歌うたタンモ。コリがホンナコツ「旅の恥はかき捨て」チいうコツタンモ。逗子の人にはヒミツ。

「へーあなた歌うの？」  
と、タマガリ召すコツ間違ひナカ！



その夜は、私がホテルに泊まるので、淋しからチいうことになり、連れが七人泊まつてくれ召したタンモ。

次の日も又別のお友達が待つとつて呉れ召した。「ミツちゃん！ よう来たねー！」と。こげんムゾガラレテヨカジヤカ？ ナシケンコゲンして寄つてくれ召すか、オイテキナカ気持のずーっと私を支配し、気がついたらゴメンシメセばかり言うてまわりよつたタンモ。

夢ん中の出来事のゴタル数日を過ごし、機上の人となる。数日間の間にすっかり柳川に身も心も戻つた私は、帰る先はナカゴタル不安な気持になつた。どつちが本当か？ 帰るゴツなかつた。いつまっデンこのあたたかさの中に浸つていたかつた。夫もいる、子供もいる、それがスラゴツのゴツ思える位、現実を忘れていた。

私の帰るところは、やっぱり柳川だつた。ふるさととは身体のみまで私を温め、安らぎを与えてくれた。もういつとき柳川のことを思い出し、その中に身を沈めたい。

よかつたバンモ。ホンナコテ有難かつ

た。友達の寛大さに救われ又元気になつたタンモ。

柳川行き以来、方言翻訳機はネドカツテしもた具合で、柳川弁が飛び出して、近所の友人が目ばパチクリさせより召すタンモ。

「サヨナラの旅」と称して、行つたバツテン、「又来たバンモ」と帰るゴツなつとつタンモ。——ヤツパふるさととはヨカノモ！

（平成十八年五月）

**津留誠一彫刻展**  
**開かれる**  
高10回 大村平人

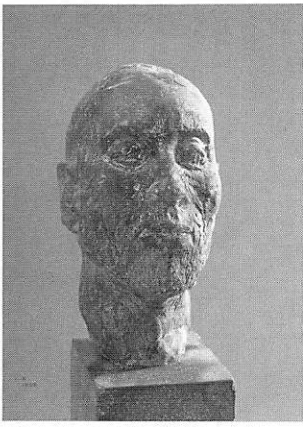
八月九日（水）～十三日（日）、「GH A 銀座アートホール」（銀座八丁目一〇番）にて津留誠一彫刻展が開かれました。銀座とは思えぬほどの静けさの中で、「釈迦の十大弟子」というテーマに相應しい雰囲気を感じました。

津留誠一君は高校（10回卒）で美術部に所属、佐大では豊田勝秋先生に師事し、在学中に文部大臣賞を受賞、八女高校で教鞭をとる傍ら日展入選するなど数々の

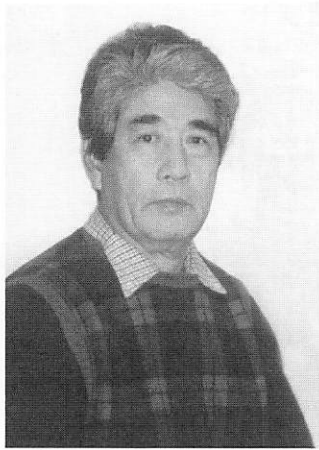
賞を手にし、「第一回現代九州彫刻展」(一九七八年)で大賞を獲得した傑作「日干し」が石橋文化センター園内に今も展示されているとのことだ。

昨夏は、釈迦の十大弟子を八女和紙と墨で表現した個展をニューヨークで開き、今回はこれを国内で発表したものということでした。製作者の勧めもあって作品を持ち上げてみると実に軽く、運賃軽減のためにははいえ、彫刻に和紙を活用するとは良くぞ考えたものと感服しました。

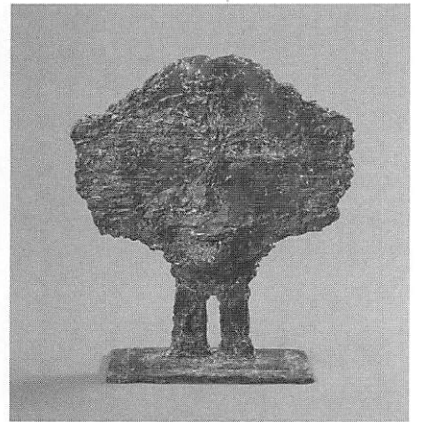
津留誠一君は、永年教育界に身をおき定年後も新しいテーマ、手法への挑戦を忘れず、地元の美術界の発展に尽力活躍されていると聞いています。



「男」18才の時(大学1年)  
初出品、初受賞作



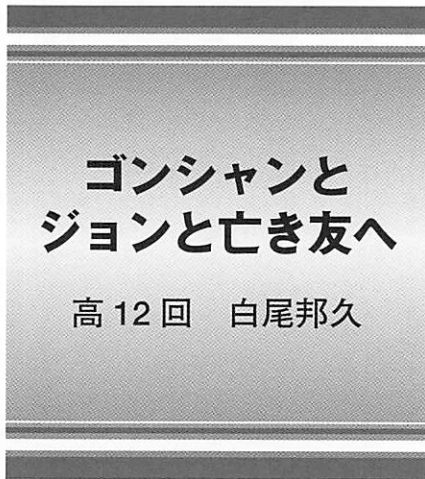
65才の私 NY 展前(2005年3月)



ASEAN 外相会議 国際美術展(ブルネイ)  
五室美術館買上げ。収蔵「自刻像」



「華」(はな) 人気のある作品です。



「伝えて習ういにしへの…」の校歌を口ずさんではや五十年に近い歳月がすぎ去

ろうとしています。久しぶりに訪れた柳川の水路をながめると「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的である。既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のほひには日に日に廃れてゆく古い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す」(北原白秋・思い出)が頭に浮かび過ぎ去った過去が走馬燈の様に去来しました。五百人の卒業生も男性陣はほぼ高度経済成長の礎として苦勞した戦士としての役目を終え自分のための第二の人生へのスタートを始めています。女性陣は子育ても終わり御主人との力強い人生を謳歌されています。

残り少い現役組として昨年九月東証一部に上場された東邦チタニウム(株)の代表取締役社長として野上一治氏が高級素材チタニウムの分野の第一線にて奮闘されています。

野上氏とは浪人時代の瀬高の川辺りの夏の合宿がなつかしく憶い出されます。一方アメリカ在住の木村耐子さんはアメリカにて得意の語学を生かし華々しい活躍をされ現在はヨーロッパ、東南アジアにて見聞をひろめ、特に毎年来日されて日本の学友との語らいを持たれ旧交を温められています。私は様々な企業に鍛えられ様々な人との出会いの後小さな輸入会社にて「世の中の女性をより綺麗に」というテーマのもとにエステというリッチな業界にて頑張っています。昨年悔しいこともありましたが。小中高の友人の井上功夫氏が八月十四日になくなりクリスマスチャンとしての雨の南部坂教会にて同窓

生をまじえた悲しい別れがありました。顧りみまずと中高バレーボールのエースアタッカーとして活躍し背は高くスマイルな私の憧れでありました島田啓一郎氏、まだ未完成の横浜ポートアイランドのランドマークタワーに招待してくれ高所恐怖症の私を元気づけてくれた大成建設の企業戦士でありました志岐孝之氏との別れもありました。友それぞれの人生。誰れも知りえない心をゆるした友。たんに懐かしいというより友人のありがたさと共に人生そのものが愛しい年代になりました。新春に悲しいことは非常識とも考えましたが伝習館十二回生として十数年に亘り継続されてきた「くっぞこ会」の同窓の友情のサークルをベースにこれからも伝習館の卒業生としての誇りを糧に力強く人生を送ることに全員が邁進すると信じます。



## 詩 3篇

高20回 椛島豊子

東の夜空にお月さま  
丸い大きなお月さま  
なぜなぜ黄色いお月さま  
少しの時間がたちました  
月は動いて見上げる位置に  
なぜなぜ動くのお月さま  
黒い夜空に白い雲――

### チャイムとでんわ

チャイムが鳴った誰だろう  
速達郵便宅急便

チャイムが鳴った誰だろう  
こんなに遅く誰だろう

夜は困るわ誰だろう

NPOのお姉さん

電話が鳴った誰だろう  
夜中の十二時我が主人



### 毎日の新聞

人それぞれのノイがあり  
人それぞれの人生があり

人それぞれの脳があり  
人それぞれの性格があり

人それぞれの暮らしがあり  
人それぞれの選択あり  
人それぞれの洗濯物あり

### ベランダ

ちいさいちいさいすずめが一わ  
かわいいかわいいすずめが一わ  
チヨコチヨコベランダをお散歩して  
すずめはどこから来たのかな

黒いカラスが飛んできた  
ゆらゆらゆれてる電線に  
じーっとこちらを見つめてる  
カラスはどこから来たのかな

カラスは降りたベランダに  
黄色のシャツと白いシャツ  
ブルーのTシャツグレイのスボン  
ところどころに水たまり

今日はとてもいい天気  
雲ひとつない青い空  
洗たく物はお日様と  
少しの風がかわかします

## 学年幹事より

### 「関東高四会」のあれこれ

高4回 高四子

「関東高四会」は、東京周辺に在住する、昭和28年卒業（高4）の同窓生の集まりである。名古屋の椛島武雄君（元中部日本放送、テクノスカレッジ役員）、宮川壮君（写真ディレクター）なども最近会員に加わり、名簿上は60名を擁する大所帯となっている。学年同期会としては比較的大きいほうではないだろうか。懇親会には、毎年20数人の出席があるが、北上から井上（塩塚）真砂さんや大牟田の宮崎有美さん（伝習館井上稔先生の次女）など、毎回のよう、駆けつけている。

われわれ同期の会は、古いことになるが、昭和37年（1962年）銀座8丁目のホテル日航最上階のレストランに10人ほど集まり、懇親会を開いたのが、始まりである。しかし、3〜4年続いたものの、その後、自然消滅してしまったようである。

その後、長い空白期間を経て、昭和59年（1984年）、倉本（金子）博子さん（公文式教室主宰、各地で後進育成の講師活動）の呼びかけで、青山の「かつ半」に集まったのが、現在の関東高四会である。その後、目黒「雅叙園」、九段の「グランドパレス」、新橋「新橋亭」、上野「今半」など、ほぼ毎年のように懇親会を開いてきた。平成12年（2000年）には、柳川方面から、高四会会長、

池上正則君（元柳川市助役、柳川文化協会会長など）、副会長の吉開光子さんほか多数の参加者を得て「品川プリンスホテル」で盛大な関東高四会が開催された。長い間、これまで、いわば会長兼会計兼司会役として、世話を続けてきた倉本さんには、感謝のほかない。白谷正敏君も、この間、男性側の世話役として連絡その他の労をとってくれたことに謝意を述べたい。

その後、倉本女史の「もうそろそろ暇になったと思うので：男性にバトンタッチしたい」と言うことで、平成14年（2002年）からは、渡邊喜亮君（元東京電力、TEE、ニューエクスコ・アジア役員）に二代目を引き受けてもらっている。

定例の懇親会は、毎年秋続いているが、平成14年は、半蔵門の「ふくおか会館」、翌年の卒後五十年記念は、虎ノ門「パストラル」での開催であった。二次会は、古賀政男の甥御、古賀譲次さん（高6）の開いている麻布のミュージックレストラン「フロイデ」に繰り込んだ。平成16年は11月の柳川の古希記念高四会と重なったため省略。平成17年には、銀座「クルーズクルーズ」のバイキングと会費低減をはかった。以前は、会費一万円が普通で、時には一万四千円という時代もあったが、最近では、会員の皆さんから、なるべく安くという要望が多く、三千元から五千円の会費で収めるように苦心しているようである。これは同窓会費としては最低の部類ではなからうか。しかし、齢七十を越すというのに、いまだに以前

同様20名以上の参加があるのは嬉しいことである。

秋の懇親会とは別に、平成14年（2002年）春、倉本さんの慰労を兼ねて、渡邊君が「千鳥が淵花見と夕食の会」を企画したが、これが契機となって、以後毎年春、花見の会が、恒例の行事に加えられることになった。花見では、数年前、荒井健之輔君（元東京書籍役員、フレール館社長）の提案で、六義園のシダレ桜を觀賞し、その後、近くのトラットリアでイタリアヤ・ワインと夕食を楽しむという洒落た集いを持ったこともある。

その他、高四会有志の会としては、当初、中川彪君（元自衛隊幹部、大成火災海上）の提案で、浅草、吾妻橋そばのアサヒビールで毎年夏に開いていた「地ビールの会」があるが、これは現在中断している。

最初、柏のゴルフコースから始まった「ゴルフの会」は、高須信治君（元三井鉱山役員）が永年幹事を務め、年二回開催がもう十数年来慣例となっている。大体8人から12人前後でプレーしている。最近、高須君は、手軽なゴルフコースに変更したようである。なお、同君は、数年前には「ゴルフ漫筆」という軽妙な文集を作り、各人の技量アップに一役買っている。

また、平成14年からは、福岡会館での高四会の席上、高石敏男君（元大同特殊鋼役員、特殊発条興行社長）から提案があつて、「囲碁の会」が始まった。水野圭介君（元大和証券、ユニバーサル証券等役員）が会員であるところから、丸の

内の日本クラブを存分に利用させてもらっている。幹事は渡邊喜亮君が務め、独自に設定した点数制で運営している。メンバー9名のうち、常時参加者は6〜7名であるが、とくに、今村啓爾君（元富士通、つくばみらい市ふれあいセンター館長）は、毎回、筑波から高速バスで直行してくれている。はじめ、碁会は隔月だったのが、夜の部の「のむかい」が楽しくて、すぐ、毎月開催に変わってしまった。しかし、一杯のつもりがつい飲みすぎてしまい、このところ、みな「山ノ神」たちの機嫌を損ねているようである。そこで、夏季には、山ノ神たちから避難して、箱根の山で、泊り込み「大いに飲むかい・碁会」と洒落込んでいる。これは、高石君の世話で、むかし、田中光顕の別荘だった「戸塚山荘」、を貸しきりで利用させてもらっている。

関東高四会とは別に、以前から、都合をつけては、三々五々連れ立ってよく飲みあるいたものである。思いつくまま、いくつか挙げると、上野、浅草の丸勢正夫君（元日本電気、エレメカ社長）行きつけのクラブに、福山恭輔君（元小野田セメント役員、内外コンサルタント社長）の銀座のクラブがある。また、荒井健之輔君の駒込のワインの数々が楽しめるイタリアレストランや渡邊喜亮君の溜池のドイツ人経営のバンド入りビアレストラ、あるいは、四谷、九段、新橋、青山、新宿などで交友の数々が目に浮かんでくる。日本橋のスナックは、水野圭介君の顔で一日中貸し切で楽しんだこともあつた。福岡在住の同期生、島田善介君（元

RKB、悠生園役員など）の従姉が開いていた焼き鳥の店もそのひとつである。これについてはちよつと面白いことがある。島田君が上京した折に、「知ってるところがある」と、W君が連れて行かれたのがその店で、全くの奇縁に仰天したという。ナントその店は、島田君との縁を全く知らずに、長年ひとりでごっそり足しげく通っていたところだったからである。ご存知の方もあるかもしれないが、亡くなった女優、新珠三千代（戸田恭子）さんの姉で、同じく宝塚出身の戸田弘美さんが経営し、みずからカウンターに立って働いていた新橋にあつた店である。そういうことで、その後、何人かで、いちにど立ち寄ってみたことがあるが、新珠さんの死去にすっかり気落ちした姉さんが、間もなく、店をたたんでしまった。そういえば、昭和29年の日活映画「からたちの花」には新珠さんの妹の桂典子さんが白秋の若き日の恋人役を演じ、人気を博したが、ロケの合間に、柳川の島田君の家を訪ねるたび、黒山の人大かりだったと聞き、柳川との縁に思い至った。

また、最近では、著書の「病気にならない生き方」100万部突破で、テレビにラジオに雑誌にと、さらに有名人になったアメリカ在住の新谷弘実君（米国アルバートアインシュタイン医科大学教授など）が来日した折、平成17年夏の半蔵門での夕食会や翌年の新橋亭での新年会も楽しい同期交友の機会であつた。

関東高四会のメンバーには、芸術的感受性に富む？ 人物が多く、大津留孝君（元間組役員）は先年、総合水墨画展に



入選し、個展も何回か開くなど水墨画に才を見せている。また、森本（樋口）文子さんは、柳川鞠や、ハンカチアートに造詣が深く、渋谷などでの展覧会には何点も出品している。原（山口）勝子さんは長年の研鑽により、絵手紙の名手である。さらには、富永（本多）たか子さんは、詩集「シルクハットをかぶった河童」で横浜詩人会賞を受賞した詩人である。

このほか、わが同期には、いろいろの分野で社会的に重要な活動・貢献をしてきた人物は多いので機会があれば順次紹介したい。

話は変わるが、高四会では、渡邊君の発案で「悠悠」と題する100ページ弱の冊子を出している。平成16年に創刊号、17年に第2号まで刊行済み、18年末に第3号の予定である。荒井健之輔、福山恭輔、丸勢正夫、渡邊喜亮、の4人が世話人となり、ほかに、柳川の古賀誠君（元弁護士）、福岡の榊永知明君（福岡山の上ホテル社長）など各地に9人の連絡世話人を委嘱している。当初、関東高四会の有志の雑誌として企画されたのだが、編集者のいくらか強引な態度もあって、柳川、福岡、関西、中部、東北から多くの寄稿を得ることができ、現在では、全国の高四会の文集の形となっている。

「悠悠」各号の構成、編集は、専ら、提案者の渡邊君が担当し、文章の活字化、レイアウトの変更や画像の補正、印刷、製本などは福山、丸勢君も分担し協力。荒井君はその他の面でバックアップしている。

因みに、「悠悠」第2号の構成を少し紹介しておく。冒頭「伝習館懐古」の欄では伝習館の沿革、当時の校舎、クラブ活動などの懐かしい写真、先生方の寸評、内外の出来事を収載し、「高四会各地の近況」では、柳川での古希記念同窓会ほか東京、福岡、大阪、名古屋での同窓生の模様を紹介している。「高四会広場」には、各地での同窓生交歓の記事、例えば、先ほどの新谷弘実君の医学講演（名古屋）、柳川、福岡、東京などでの同級生懇談の模様、ゴルフや囲碁の会の記事がある。続く、「身辺雑記」「随筆翻翻」の欄では、各人の思い思いの文章を載せている。みずからも伝習館で教鞭をとった柳川の中村信人君（元高校教諭、大学講師）は、平出悦一（英語）、秋原孝（体育）先生のほか、鬼籍に入られた古沢芳吉（社会）、広松武夫（数学）、井上勇（国語）、平川吉一（数学）その他の先生がたについて、エスプリに富んだ寸評、回想を述べ、柗島啓之君（元住友石炭鉱業役員、扶桑開発社長）は平出先生から受けた自宅での英語の特訓について感謝の気持ちを、また、福岡の本村正治君（元福岡通信用病院院長）は英国留学中の恩師の葬儀に参列した感激と想い出を、それぞれ語っている。また、「やながわ今昔」は、画、詩、写真など新旧とりまぜた寄稿で成り立っている。

さらに、創刊号には、柳川から、与田邦彦君（元高校教諭、木村緑平顕彰会役員）が「雀の俳人」木村緑平について、中村信人君が国文学者、藤村作についてなど、郷里の文人達の事跡を紹介している。

のも得難い記事である。この「悠悠」誌は、同時期に、「同じ青春時代」を共有する連帯感と懐かしさから発生したもので、全学年を網羅する同窓会誌とはまた一味違った親しみがあられる。まだこの種の刊行のない学年があれば、是非奨めたいところである。

**高6回（昭和30年卒）  
だより**  
高6回 石橋 修

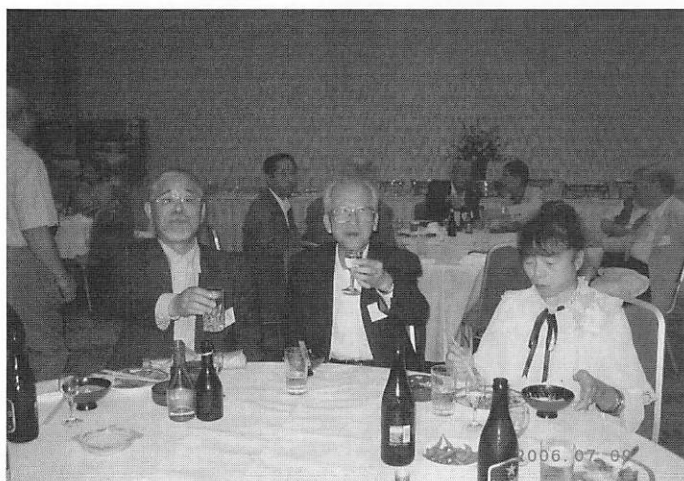
▼7月9日に開催された伝習館東京同窓会には、私たち高6回卒は十一名が参加しました。紅一点の木村峯子（旧姓松本）さんが、静岡・伊豆から久しぶりに元気な姿を見せてくれました。甲木康博君が前回の三稜会に続いて、山梨から参加し旧交を温めました。松永伍一先生の講演会では、大茈中学校で先生の最初の教え子であった松永真侍君が、最前列で先生の講演に聴き入っていたのが印象的でした。抽選会では「お花ペア宿泊券」を白谷茂満君が見事、引き当て、私たち高6回卒のテーブルが大いに盛り上がりました。

▼次回の三稜会を、平成十九年三月八日（木）に開催しようと、幹事一同で準備を進めています。前回は北海道・札幌から中村充君、静岡・焼津から徳永

剛一君らが遠路参加してくれ、活気のある同期会となりました。

正式案内状は一月下旬にお届けする予定です。皆様お誘い合わせの上、多数のご参加をお待ちしています。

写真は 右 紅一点の木村峯子さん。  
中央 常連の戸上軍治君。  
左 「お花ペア宿泊券」をゲットした白谷茂満君







上覧された河童の手

筑後地方には、河童の伝説が多く伝えられています。柳川もその例外ではなく、内山田家の河童の話などが伝えられています。ところで、柳川の話ではありませんが、『新考三浦郡誌』には、次のような伝説が収められています。

芦塚村（久留米市城島町）の医師江頭某が飼っていた馬を川で洗っていたところ、河童が馬を川の中へ引きこもろうとしていた。そこで江頭が馬を離れ、驚いた馬が地上へ駆け上がったため、河童も馬の脚につかまらずにそのまま地上に引き上げられてしまった。すかさず、江頭は刀で河童の手を切り落とし、家へ持ち帰った。河童は、何度も江頭の家へやって来ては手を返すよう頼んだが、これを許さなかつたという。

続けて、この河童の手は長く江頭家に保存され、その後柳川の広松家へ伝わったと書かれています。ところで、昨年その広松さんから柳川古文書館に文書が寄贈されました

が、その際この河童の手も寄贈されました。河童の手には、書状を三通折り込んだ巻物が付いていました。三通折の書状は、日付順に、福永唯八（御納戸当番、以下いずれも久留米藩）→松平元丈（藩医）、松下元丈→磯部夢覚（医師か）、磯部夢覚→左助となっており、最後の右助が河童の手の持ち主と考えられます。この書状によると、この河童の手は、久留米藩の世継ぎであった有馬定之丞頼善（寛政五年薩藩で家督を継ぐことはなかった）に上覧されたことがわかります。頼善はこれをいたく気に入ったので、御守りにするために一爪先少御所望したようです。実際に指先は献上されたようで、伝わっている河童の手を見ると、一本指先が欠けています。

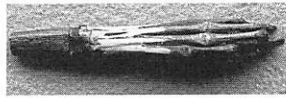
柳川の内山田家の話もそうですが、河童の手を切り落とし、それを河童が取り戻しにやってくるというのは、河童の手にまつわる伝説の代表的なモチーフです。しかし、このように藩主の世継ぎに上覧されてその一部が献上されたこと、またそのことに関する一次史料が残っていることは、極めて珍しい例であるといえるでしょう。

市史編さん係 白石重樹



▲松下元丈から磯部夢覚への書状（広松家文書）

▼河童の手（広松家文書）

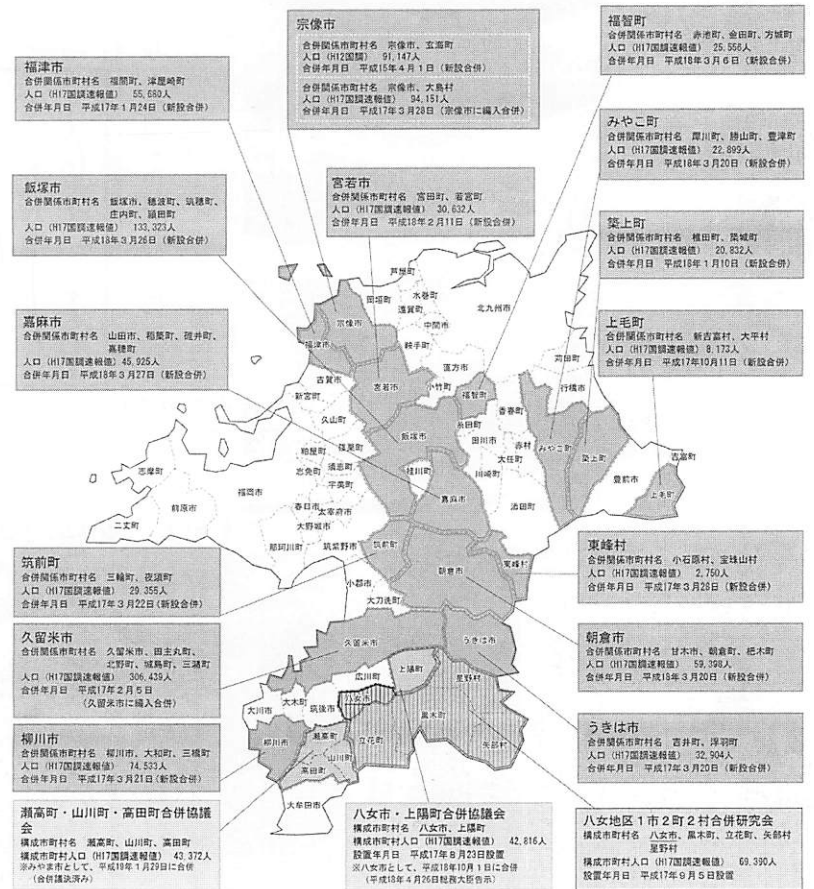


▲市報「やながわ」2006年8月1日号より

合併情報  
アプローチ

今回は、県内の合併状況についてお知らせします。福岡県では17の地域で合併が行われ、市町村の数は97から69に減少しました。今年度は1月29日に瀬高町・山川町・高田町の3町が合併する他、八女市と上陽町が10月1日に合併する予定です。

福岡県市町村合併マップ



※注：複数の合併協議の枠組みに加入している市町村には、下線を引いています。

▲広報「せたか」2006年6月号より

# 書籍紹介

○「やながわ」2006年2月1日号より

海老名弾正

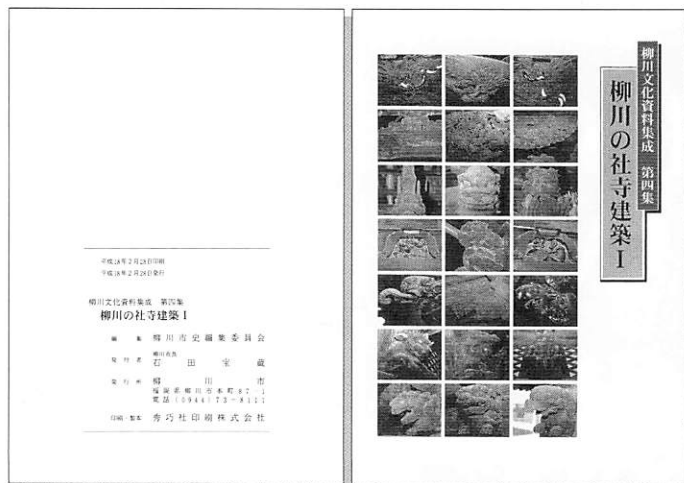


田中さん海老名弾正生誕  
150年を記念し出版

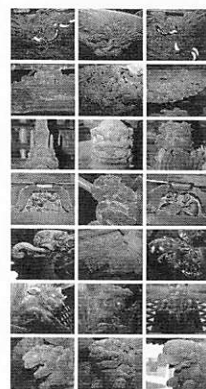
郷土史家の田中省三さん（上宮永明・62歳・ペンネーム＝兎童忠恕）が、柳川出身で同志社大学初代総長の海老名弾正（1856～1937）の半生とその思想をたどる「明治という時代の『良心』～柳川が生んだ海老名弾正の日本的キリスト教」を出版しました。A5判で211ページ、1300円。市内の書店で販売しています。詳しくは田中さん（☎74・2385）まで。

## ○柳川の社寺建築Ⅰ

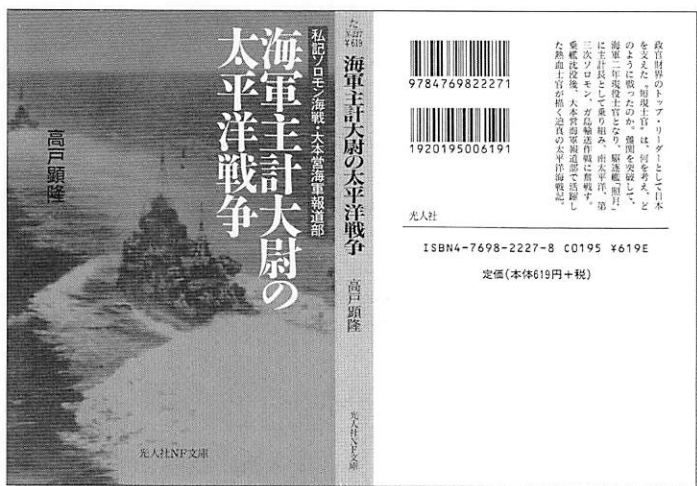
柳川市史編纂委員会



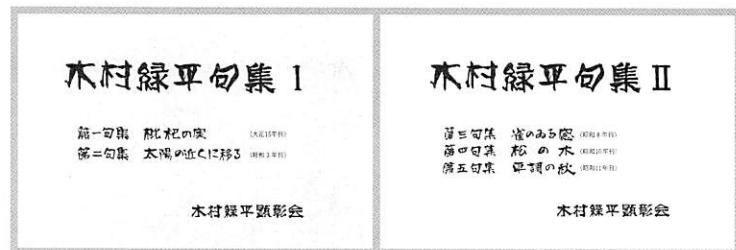
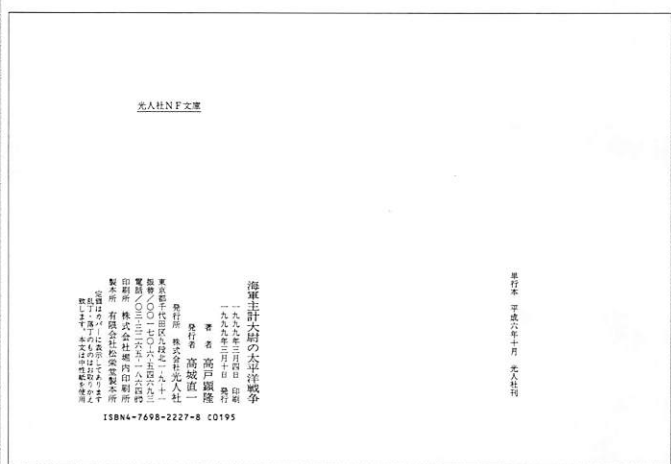
柳川文化資料集成 第四集  
柳川の社寺建築Ⅰ



柳川文化資料集成 第四集  
柳川の社寺建築Ⅰ  
編集 柳川市史編纂委員会  
発行所 田中省三  
発行所 柳川市史編纂委員会  
発行所 柳川市史編纂委員会  
発行所 柳川市史編纂委員会  
発行所 柳川市史編纂委員会



○「海軍主計大尉の太平洋戦争」 高戸顕隆（中41回）



○木村緑平句集Ⅰ・Ⅱ  
木村緑平顕彰会  
左：2004年10月刊  
右：2005年10月刊



○私のむかし（少年の日）原画展 森田まさひと（高13回）



# FAX 送信紙

FAX : 03-3918-8139

伝習館東京同窓会事務局 御中

発信者お名前

---

TEL : FAX

中学 : 高女 : 高校第 回卒

事務局への意見、連絡、感想など。

又、会報へのご投稿（短文、詩、短歌、俳句、川柳など）に使用下さい。

## 募集中!

1. 表紙絵・表紙用写真
  2. 原稿—伝習館OBならダッデンヨカバンモ
- テーマ—自由(同窓会報にふさわしいもの)  
小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳・絵画・写真・絵手紙・書など
- 字数制限なし(極力四〇〇字詰め(20×20) 原稿用紙使用)  
写真・絵・カット添付可
- 表題・投稿者氏名・卒業年度・総字数を書いて下さい。

—原稿送付先—

〒344-0032

春日部市備後東8-8-32

伝習館東京同窓会 小野 善睦 行

☎・FAX 048-735-2431

## 広告募集

### チラシ広告

対象—東京同窓会会員向けに製品・商品営業内容をPR、販売したい方。

- チラシ三千部を作成し(フォーム自由)事務局宛(裏表紙参照)送付下さい。会員への会報送付時に同封郵送します。
- 広告代金—一件につき万円を賛助金として頂きます。

会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

### 編集後記

○会報が年一回の発行になったせいか、皆さんからのご投稿が増えたせいか、今号では頂いた原稿の掲載を見送らせて頂いたり、カットさせて頂いたり致しました。悪しからずご了承下さい。

○高3回酒井清行学年幹事より—伝習館野球部OB会の選抜チームが「マスターズ甲子園2006」大会に出場、快勝した。——との朗報あり。締切後の為詳細は次号に掲載予定——小野記

○皆さんからの連絡、小原稿の送付などに利用頂くよう事務局宛のFAX送信紙を一頁作りました。気軽に送信下さい。

○次号(第8号)表紙絵・写真募集中です。

○現在の編集委員は次の通りです。

小野 善睦(高2)

内山 秀生(高10)

永倉(跡部)素子(高10)

会長 江崎 正直(高2)

副会長 松永 肅(高5)

発行責任者 原田(立花)万紗子(高13)

発行責任者 江崎正直

〒156-0043

東京都世田谷区松原3-39-25-801

# 伝習館東京同窓会学年幹事名簿 平成18年11月現在

卒業年次	氏名	卒業年次	氏名	卒業年次	氏名
中学第48回	宮本弘道	第6回	石橋 修	同上	十時理展
同上	中野貞幸	同上	井上弘子	第19回	芹川季代子(立花)
中学第49回		同上(会計)	荻島直記	第20回	高巢和登
中学第50回		第7回	田中敬之助	同上	東 寛治
中学第51回	松田 含(星野)	同上	龍 弘道	第21回	西原正道
中学第52回		第8回	樋口誠祐	同上	白谷政則
中学第53回	古賀和典	第9回	石橋淑子(古沢)	第22回	北原富美雄
同上	木下憲男	同上	原田光紀	第23回	坂本智臣
中学第54回	浅山親司	第10回	内山秀生	同上	成田八重子(成田)
同上	富重克巳	同上	永倉素子(跡部)	同上	樋口貴美子(田上)
中学第55回	江崎和夫	第11回	北原 博	第24回	酒見和平
同上	小泉祐一郎	第12回	甲木宏明	第25回	
中学第56回	鬼丸敏男	同上	小野アケミ(岸川)	第26回	
同上	成清良孝	第13回	田中利道	第27回	高田浩一
同上	永井俊一	同上(会計)	石橋正通	第28回	吉開孝人
高女第45回	石橋佳香(石橋)	同上(副会長)	原田万紗子(立花)	第29回	
高校第1回	永江政勝	第14回	石橋俊一	第30回	橋爪政男
同上	増尾義勝	同上	長尾俊郎	第31回	
第2回	石崎知見	第15回		第32回	
(会長)	江崎正直	第16回	梶島正司	第33回	廣松崇人
(編集委員長)	小野善睦	同上	安倍環江(松藤)	第34回	
第3回	酒井清行	同上	水澤昭子(田中)	第35回	山口英治
同上	志牟田徹	第17回	宇木博巳	同上	橋本知彦
第4回	荒井健之輔	同上	浦川邦憲	第36回	松藤 亘
同上	丸勢正夫	同上	下吹越智佳(横山)		
第5回	岸 栄洋	同上	藤木清勝		
(副会長)	松永 肅	第18回	福山博彰		

幹事未選出の学年は至急選出して事務局までご連絡下さい。



伝習館東京同窓会事務局

〒170-0003 東京都豊島区駒込3丁目3-19 千鳥屋方

TEL 03(3915)0865 FAX 03(3918)8139

<http://www.asahi-net.or.jp/~dv4h-fior/densyukan.html>